してその天然とその間の追懐とが自分を動かす爲めてある。

此の如く自分の趣味は天然と歴史とを離し得ない。京や奈良の風土、陸奥の中尊寺、吉野の山川、嚴島の山海、壇の浦の風光、皆此が爲めに懐郷の種となつたので、外國に居る間にも故國の事を想ひ或は夢ると必ず此等の天然を忍ぶ情がその中に現はれてをつた。又今故國に歸つて後に彼國の事を忍むで心往の情に堪へないのも、多く此の如き山河風光である。前の日にはシナイの山を望み、夕に沙漠の月を眺めて、その次の日、日沒の紅を行手に見て地中海オクシデント（日沒國）に入つた時の古今俯仰の情。ラインの河を下つて古城堡の中に中古ミンヂ歌人の昔を忍び、幾多の詩人の吟咏を心に誦した時和蘭から英國に渡る海上に、大陸の燈火消え失せて星光のみ天上に輝くのを眺めて「飛びあるく和蘭人」を思つた一夜。ヂミの湖上にその古のデアナの祭壇、司祭の屠殺の跡を訪ふて、その歸路アルバノの

湖水深く靜に湛へた邊に明月を望むだ夕。若くは又星斗爛たる夜半に佛陀伽耶古塔の下に立つて、さや〳〵と夜風に靡く菩提樹葉の影に佛陀成道の古を忍むだ時。嗚呼此等を筆にするさへ、自分の心はその地に飛び、氣はその時に去つてしまう心地がする。此等の感情は到底自分の筆に及ばない、又恐らくはその境に立ち、その感を抱いた人でなければ十分に同情は出來ないのであらう。自分は實に天然と人事との結合から宏大なる趣味、深厚なる感化を受けて之を天地人生の主に感謝するのである。

（三十九年、正月）

ワグチルの理想

（高山樗牛に與へし書簡の一節）

五月十五日。昨日は日もてり少し溫暖なりしかば、町にも出てしが、今日は再び曇り勝ちの雨空なれば、朝より家に籠りてニーチェのワグチル論を讀み了りぬ。彼れが才筆の流麗にして而かも字句の間に無量の力ありて、彼れの人物を表するは今更云はずもあれ、彼れが其の畏友なるワグチルの人物理想を透見し、其の心事を照し、其が自己の主義、否人間の救主といふべき美術（特に樂劇）の爲に健闘し、苦悶し、悴勵したるの跡を論ずる手ぎは、實に此人にして始めて此人を評すべしと思はれぬ。ワグチルの傳記を以て名あるチャンバレーンが、『ワグチルを知るは彼を愛する一事あるのみ、而して又彼を愛する者は、ニーチェの「バイロイトに於けるワグチル」の一文を讀まざるべからず』といひしは、至言なり。ワグチルに對する愛とは、即ち彼れが總ての作に於て皷吹し表現したる絶對の愛なり。心を一にし苦悶と理想と健闘と希望とを一にして人格を融合するの愛なり、人格の合一なり。ニーチェは其の晩年に愛の見解と貞潔の德とにつきて此の畏友と見を異にするに至りしも、二者がシヨペンハウエルの一切意志の形而上論に思想の根底を共にし、此の意志發表を高尚にし、超世的にして人間を改造せんとの努力希望を一にせし點に於ては、二人の愛は永遠なり。其の人物の偉大にして萬艱に屈せず、一に此の理想の爲めに畢生を捧げし彼等の精神は、一理想の化現といふの外なきなり。君よ、友といふも此の如くにして始めて眞の友といふべきにあらずや。

此の二人につきて僕の渴仰を君に書き送ると共に、默して止む能はざるは、此の二人とシヨペンハウエルとの關係、否三人の見解、主義、努

力理想を一貫せる人間改造の偉大の福音なり。ショペンハウエルは意志の否定を以て道德の根底としぬ、ニーチェは意志の擴張に世間道德の超越を敎へぬ、而してワグチルは意志の融合なる愛に、人生の歸趣を求めぬ。若し冷淡に論理的或は形式倫理的見方にて、此を評せば、三者各異なるのみならず、ショペンハウエルとニーチェの如きは正反對の學說なりと稱し得ん。されど學說の異同はスコラ學者に一任せよ、意見の徑庭(meinungsverschiedenheit)は凡俗のいふに任せよ。僕は思ふ、此の如き學究的見方は、決して此の三人の天才が濁世人間に將來せし大福音を解するの方にあらず。三者の根本見地が一切意志の形而上論に存し、岩の磊々、水の啾々の中にも、意志の聲を聞き、飛禽走獸の棲を求め食を搜り子を愛する總ての行動に於て、同一意志の活動を直觀し、宇宙此に依りて生々活動の中に一貫の條理と統一の根底とを有するは、三者の根本的世界觀にして、此の直觀と哲學とは

ショペンハウエルが十九世紀の思想に齎らせし天籟なり。印度哲學の根本觀と歐洲の思想界とは、此人に依りて確乎不動の契合を得、人生の大秘は此に依りて、發揮せられたり。大學の先生學究的敎育先生に依りて、非科學的空想の名を被らせられし此の世界觀は決して彼等の形式的科學に壓倒せらるべき者にあらず。見よ今のドイツの大學先生中最も敎育的なりとの令名を有し、其意見最も穩健公平なりとて、ドイツのみならず日本の所謂る科學的思想家に最も信用せらるゝパウルセンも、形而上論即一切思想の根底に至りては到底ショペンハウエルの外に出づる能はざるを自白したるにあらずや。此の如き瑣事君に對して說くの要あるなしと雖も、日本の學者先生の參考に供せん爲め君に書き送るのみ。

ショペンハウエルは、一切の現象に nominatio a potiori なる意志の活動を見たり。而かも其の道德に至りては、此等志の否定消滅に一切の

善德を認め、無我無慾の境に世間解脫の至境を發見したり。彼が不變不動と斷ぜし個人の意志が、如何に知の炬火に照らされて、世の味なき意志努力の望なきを見たりとて、此く否定せられ又消滅し得べき者なりや。又彼が意志消滅の導者なりといひし知は、意志の奴隷若くは副產物にてありながら、如何にして其主家を壓滅し得るや等の難問は今暫く深く入らずとするも、唯一の實在たる意志が其個々の發表、即諸の無生物並に生物の個人意志を否定し、個人的現象差別を消滅したりとするも、其本家本元たる實在は何れに存するや。言を換へていへば、彼の所謂る意志消滅とは眞の消滅なりや。此の疑問は此の哲人の頭腦にも存したりしなり。彼は此境を稱して「涅槃」といふの外なかりき。涅槃、此一語の中に、彼れの形而上論と道德解脫論との矛盾は蔽はれしなり。原始佛敎が無我寂滅の理想標幟とせし涅槃が、大乘佛敎にて、大我久住の涅槃と轉ぜし變化は、又此人

の思想にも起るべかりしなり。

此變化は彼れの老成固定したる頭腦には起り得ず、新鮮の生命に新鮮の希望光明を貯へし一時代後の天才ニーチェに起り來りぬ。新鮮なる意志發表は、又新鮮にして一層天眞なる意志の要求を將來せり。ニーチェは始には、ショペンハウエルが總ての現象は意志努力の結果なりと說きしを信じたり。されど彼は、異常の强き意志は又異常の結果を此人生に呈するを確信したり。異常の意志とは即ち天才なり、彼れの晩年の所謂る超人なり。ニーチェは此の如き異數の意志發表をば、彼が意志否定の說敎を聞きし其のショペンハウエルの人物に於て發見したり。ショペンハウエルの人物は、即ち彼が眞に世に天來の福音を持ち來たす天才、世を救ひ人を改造すべき眞正の哲者(學者知者の哲學者にあらず、人生の眞趣を發揮し、宇宙の奧秘を發掘すべき哲人 Philosoph, lover of wisdom)の標本なりき。君も知らん、彼れ

が「教育家としてのショペンハウエル」一篇は即此の標本實例を發見したる喜びの發表、此の天才偉人に對する衷心の渴仰の宣布なり。ライプチヒの書生時代に於ける彼れ一生の此の初戀は、彼れの一生を支配する偶像なりき、又彼れ自らの眞價値と天職とを自認せしむる光明なりき。されどニーチェはショペンハウエルの意志否定の解脫說に對しては、始より同情少く、此の解脫說と意志本位の哲學並にショペンハウエル自身の自信厚く意志强き人物との間に、離すべからざる連鎖ありと思はざりし者の如し。彼が最もショペンハウエル的の見解に立ちて、世相の無意義にして人生の浮雲の如きを思ひし時代にありても、此の如き厭世觀の結果として、解脫を意志の否定、個人の消滅に求めたる跡なし。此時代の作「悲曲の誕生」に於ても、音樂が此の厭世觀の必然の發表にして、人生の眞摯の聲なるを論ずるも、此の悲痛の人心に觸るゝ音樂は、即人情の深奥なる衷心を發揮する

者、人生の天眞を赤裸々に直觀に訴ふる者とせしまでにして、此故に此の人生意志を消滅すべしとは考へざりき。此を以て其より五年後にショペンハウエルの人物を論じ、眞の哲人、教育家の標本偶像を此人に求めんとせし時にも、教育家(即ち萬人が理想とし模標とすべき大人物)なるショペンハウエルは、自己意慾の旺盛なるに反動したりとも見ゆる(多くの傳記之をいふ)意志消滅の涅槃を求むる牟尼なるショペンハウエルに非ずして、一世の學風に反抗し、毅然として自ら持し、屈せず撓まず自家の信仰を以て世を風靡せんとせし勇猛の戰士なるショペンハウエルにありき。一切の世の樂み幸ひを超ゑ、一切世間の現存制度、文物の到底永遠の光明たるべからるざを透見し「高く世を瞰下し、燈臺の光が脚下に澎湃せる暗夜の波濤を照して獨り不動の光明を與ふるが如く、世を超ゑ人を離れ、世の榮辱喜憂を絶して自己の中に無限の靈光を」發見したる聖人のショペンハウエルなりき。

ニーチェの個人絶對の超道德や、人間改造の說や、超人聖人の理想は彼れ自らが晩年に力を込めて主張せし如く、意志消滅の解脫寂靜には正反對なりき。されど此の理想は、彼がショペンハウエルの學說のみならず、其の人物に活きたる實例を見て渴仰措かざりし結果なり、といはん。君よ、僕の此の言を以てニーチェが單に人の說を借りて之を變形したるに過ぎずといふ者と見る勿れ。彼が天才性格は、此點に於て實にショペンハウエルの人物と呼吸相通じ、意氣投合せしなり。愛即意志の合一にあらざれば知る能はざる偉人の意志本躰に於て、彼は愛と投合との好對象を得之に依りて大光明を得しと僕はいふなり。

ニーチェは此の如くにして一旦此の模範的偉人の中に自己の理想を得、否自己の性格と天職との光明を得たる後は、猛然として天才個人の尊嚴を說述し、之に絕對の威嚴を付與して、盛に超人の理想を皷

吹したり。此に於てショペンハウエルの厭世觀と解脫說と、又ニーチェ自身の一旦の悲痛深酷なる世界觀は朝の霧の如くに飛散消滅して、彼れの眼界には永遠の理想の光明輝くのみ。「快濶なれ、笑へ、跳れ、舞へ」の福音は、此の光明の中に浮動せしなり。「一切の中に非眞理を見、好で不幸を友にするの人は、又他の不思議の既に己れに近づきつゝあるに驚かん。其前には、幸福といひ眞理といふ者の單に木偶映像に過ぎざる不思議の或るものは彼に近づき、世界は此に依つて其の重みを失ひ、世の紛々たる威權といひ、事件といはるゝ者は總て此に依て夢の如くなり、恰も夏の日の夕やけが、淸淨の光を其の周圍に遍滿する如くならん。此く透見しつゝある人には、恰も今まで擾々たる夢の雲が彼を圍繞せし中より覺醒し始めし如くならん。かくて此雲は終に散ぜん、かくて光明は來らん。」かく、ショペンハウエルの精神的健鬪を畫きし彼は、恰も此言が彼れ自身の心界經歷の豫言とな

りし者の如く、總て悲觀を超越し、今まで世相の係累に憤り悲みし雲霧は散じ盡して、絶對の威嚴ある天才の光明は其上に輝き始めたり。超人の化現、ザラトストラは彼れの上に神來せり。僕は此の如くニーチェの心裡を觀るが故に、一見しては全くショペンハウエルの解脱說道德に反對なる彼れの個人說は、却てショペンハウエルの意志の哲學、意志の人物の、自然の結果なりと見るなり。ショペンハウエルの人物を赤裸々に呈露して、其思想を奥の奥まで進ましむれば、即ちニーチェの超人は生まれ出でん。

僕はショペンハウエルの哲學に於て不動の光明を見る、從て又ニーチェの超人の理想に大なる光明を見る。されどショペンハウエルの意志消滅には、散じ難き雲霧の蔽はるゝを感ずるが如く、ニーチェの個人觀につきても、亦拭ふべからざる汚點の存するやを思ふ。彼は雲霧を拂つて日光を吾人に示したり。されど其の太陽には光明輝赫

の中に尙黑點あるを見る。太陽の光は强し、到底吾人の抗し得る所にあらず、されど其の黑點は太陽を稱して無垢純美の光明といふ能はざらしむ。ニーチェの意志、彼れの個人性は餘りに猛烈なりき。其の意志の膨脹は、總て其の途に當れる他の意志存在を殺滅し破壞せずんば止まざらんとせり。彼が超人の意志は、總を包擁して膨脹せんとせず、總てを排斥して其の威嚴を保ち、其の寶冠を戴かんとせり。彼れの超人は鷲の如く、總てをつかみ嚙み殺さずんば止まず。孔子は聖人出てず麟の知られざるに失望し、ニーチェは鷲に超人の表象を見たり。「最惡は最上の超人に必要なりき」。此くいへばとて、僕は世の職々の徒が、區々たる善惡の名を以て彼を律し、彼を惡人とするの跡を追ふにはあらず、又彼れの意志の直進を非とするにあらず、只其の意志が餘りに孤獨なるを惜むなり。特に其の晚年に至りては、身心の衰弱と共に過敏なる神經が其の意志の猛烈に異常の衝動を與

へ、彼れ自らも自らの中に敵を見、自らに對して怒る非境にまで進みしを悲むなり。僕は此を思ふて、毎に此の偉人の爲めに涙を禁ずる能はず。師ドイセン先生も說きし如く、彼をして家をなし家庭の歡樂の中に徐に其の思想を涵養せしめば、との思を禁ずる能はず。まして此の身心の異常は、其の幼時より孤兒として家名と慈母と妹とを思ひて、自ら刻苦して神經系統の打擊を受けしと、又戰時に負傷の兵士を思ふの餘り、義勇公に奉じて肺患を得しとの結果なるを考ふれば、尙更此の心情あり、慈愛に富みて、而かも毅然不撓の勇猛心を有せし天才の爲めに萬斛の涙をそゝぐも尙足らざるを覺ゆ。世の俗論者ニーチェ學說の一端をきゝかぢりて、直に此の人を誣いて非道無情の惡漢と吹聽するは、何等の無情ぞや。嗚呼幼より孤兒の辛慘を嘗めし僕と、病に罹て世路の艱難と鬪ふ君とは、共に此の偉人の爲めに不德の讒誣者に大打擊を加ふべき位置に居らずや。蓋し此の如

き讒誣者も、始より惡意ありしにはあらで、只ニーチェの學說の一端が世の所謂る道德に異なるを見て、自ら善人となりて此の惡しき超人を疾惡するに至りしならん。此を見ても世の形式的方便的道德の如何に人の同情を蔽ひて人の品格を汚辱し、世に惡毒を流しつゝあるかを見るべしと思ふ。世に恐るべき者は善惡超越の超人理想にあらずして、却て善惡拘泥の俗論にあるを知る。

君よ、遠く他鄕にありて、故國の文明世潮を見る僕は、日本の社會が如何に此の如き方便名目に拘泥して、紛々敎育といひ倫理と叫べるを思へば、每に肉躍り胸割くるの感を生ず。今ニーチェに關して、思はず此事に及びしも、情禁ずる能はざればなり。

意志の永存はショペンハウエル自らも轉生の說(彼は輪廻 Metempsychose といふよりは、寧ろPalingenese即個人意志の永存轉生を說きぬ)に明言せり。且や此事は彼れの道破せしと否とに係らず、人心の必至

の要求なり。僕は此故にニーチェが意志の威嚴を發揮せしを喜ぶなり。されど今個人差別の現象を出沒轉生せしむる此の意志は、如何にしても又如何なる方法にても、融合の道なきや。此疑問は即ち僕をしてニーチェの排斥的なる意志膨脹に滿足せしむる能はざる所以、此黑點なき太陽の純潔の寂光なきやを求めしむる所以なり。君よ僕は喜びを以て君に語らん、僕は此の如き光明をワグチルに於て發見し得べきを髣髴の間に望むを得しなり。

ニーチェがワグチルに於て無二の畏友を發見せしは、此の希有の音樂者詩人が、直截に人情の天眞に訴ふる美術を以て人間を改造せんとする、所謂 Regeneration の說、否理想希求に衷心の同情を有せしと共に、又彼れの人物が總て世の困難に遭ひ、俗人の排斥を被ると共に一難毎に勇氣を皷して其の理想に忠實に、其の愛の福音を自らに實現せしを敬重せしに出づ。即ちニーチェがショペンハウエルを渴仰せし

所以は、又彼をしてワグチルを愛し、ワグチルと同躰ならしめしなり。而して此のワグチルは、又實にショペンハウエルの世界觀の大使徒なりき。此三人の天才が呼吸相應じ意氣投合の精神なりしは僕の最も驚歎し又最も喜ぶ所なり。ワグチルも亦ニーチェと同じくショペンハウエルの意志の哲學を體得し、此の哲學は彼れの心境に赫々の明光を與へしを喜び、且つ音樂者として特に、ショペンハウエルの音樂は天眞體露の聲、超世の言語、宇宙の奧祕を闡て直に人の肝腑に徹する者なりとの福音を宣傳し、實現するを以て、一生を貫きし偉人なり。且彼はニーチェよりも一層近くショペンハウエルに接近して、意志寂滅の解脫に於ても深く歸信せしなり。されど茲に奇とすべきは、彼がショペンハウエルの書を讀まざるの前、寂滅解脫の敎を奉じ、其の書を讀みて(一八五四年)、此に依りて自己の思想が日光の如くあかるく(sonnenklar)なりしを喜びし後は、却て漸次之に遠かりて終

に愛の全能にうき身やつして、自家の安逸をも何をも此福音の實現の爲めに犧牲に供せし事なり。此の前後の思想變遷に關する哲學史的考究は、今此手紙にて語るには餘りに長くなるを如何にせん。只彼れの詩作と音樂とにつきて見るも、一八五四年前なる作は「タンホイゼル」にしても「ローエングリン」にしても、「飛びあるく和蘭人」にしても愛の死を以て一貫するは其後のに異ならざるも、其の愛には寂靜の趣あり。タンホイゼルの最後の「救ひのコーラス」の如き、梵唄を思はしむる如き寂滅の響きあり。和蘭人の最後に、センタが其の一旦の夫に殉じて死する僅二句の歌の如き、非常なる激動中に靜なる抒情的の調を帶べり。ローエングリンが戀人と此世とに別れて仙島に去らんとする時、白鳥を呼ぶ聲の幽かに響くは得脫レジグチーションの聲にあらずや。然るに一轉してニーベルンゲンに至れば、ワグチルの愛は此の如き寂滅の愛、意志の融合にあらずして、猛烈なる熱情に

依りて得られし意志の强き膨脹的の愛となれり。若しヲータンがブリュンヒルデの眼に接吻して其の眠を火中に封じ去る段の音樂をベートーエンの第三シンホニーの最後のアダンテに配すべくば、ブリュンヒルデが愛馬グラチに乘じて、戀人ジーグフリードの尸を燒ける火中に投じ行く「愛の全能の譜」は、第九シンホニーの「神の火花なる喜び」を歌ふ最後のコーラスに似たる者あるを覺へしむ、意氣旺盛の愛といふも可ならんか。此の前後の變化は、一はワグネルが漸次樂劇の天職を自覺して、其の作に戲曲的統一とモチーフとを明晰にするを勉めし結果、先の抒情的寂滅の音が健鬪を經たる戲曲的最後に轉じたるにも因るべきも、而かも此の如き戲曲的自覺と技量との發達せしは、愛に關するこの人の觀念が圓熟して、意志消滅の死的の愛より、轉じて意志擴張の包括的の愛に進みし結果と見ざるべからず。此の如き天才の一切の變化は、決して外形に起らずして、衷心より外面に及ぶ

者なればなり。

僕がワグチルに於て、人生問題の奥祕歸趣を學ばんと欲するは即ち此の點にあり。彼は何故に寂滅の福音より大我包括の愛に轉ぜしか、又何故に此變化が特にショペンハウエルの哲學を知りし後に來りしか。此の二問題の中には、恐らく總ての哲學宗敎美術、否總括的に人生の奥祕を含有するを覺ゆ。

茲に再び僕をしてショペンハウエルの寂滅解脫を回顧せしめよ。彼れの哲學が寂滅の超世又超道德的解脫を歸趣とせし根底は、此世が意志の相互排斥、自己主張の場にして、而かも此の主張擴張は決して圓滿に滿足せらるべき性質の者に非ず、終に失望に終るべき者なるが故に之を否定して一切爭鬪紛擾の種を消滅せよといふにあり。此の哲人が此の解脫を說くや殆ど詩なり、又た宗敎なり、單に知識や哲學といふべき者に非ず。されど彼れの說に從へば、意志擴張の無

意義なる事を個人に知らしむるは、一に知の導き、知の炬火に依るなり。茲に吾等をして試に此の知的判斷に基きて寂滅を觀察せしめよ。意志の主張が思ふ如くに行はれず、我欲我執が皆無意義に歸するは、他に同樣の個人意志ありて、其の主張に依りて我と鬪ひ我を壓抑するが故なり。されば寂滅を希望して、我の意志を滅するは、他の意志に讓歩し他の意志主張を助長する所以にあらずや。此く考ふれば、ショペンハウエルが個人の知見(その哲學にては知は個人のみに存す)が意志を消滅し、寂靜に入らしむるといふは、如何にも無意義に、少くともあつけなく思はるゝなり。ニーチェは自家意志の要求に應じて、ショペンハウエルの人物と哲學との中に意志擴張の妙音を發揮せり。而してワグチルの天性慈愛同情深き精神は音樂の深き天來の音と同化し、此に依りて彼れが腐敗せりと見し人生の中にも、彼れの天職と信ずる樂劇の事業を惡魔視する社會にも、總て惱みを共に

し、悲喜を同じうする同情の愛を發見し得たり。一切の世の煩累を超へて人情人生の奥底を表現し、形而上的融合の理想を言語や思慮の外に訴ふる音樂は、此融合の愛の恰好唯一の宣布の具なり。此の愛は彼をして意志の中に一切に遍滿し、又一切を融合して、爭なく失望なき愛の光明の中に沒し去るべき微妙の福音を發揮し宣布するの任に當らしめたり。彼れの同情の福音、愛の全能の宗教は、知力的言語にていひ表せば、彼が「宗教と美術」(全集十卷三一四頁)の言能く之を盡くせり。即ち彼は人間の歷史や文明の總て無意義の反復や腐敗に外ならず、眞に新原造のなきを論じて云へり。

『人間は總ての現象の中に同じ意志ありて相爭ふを見て、自らの生存の恐るべき者なるを知り、最後の解脫の要を思ふに至れり。人がその意志を積極的に行はんとすれば、其の結果は常に消極的に自家の否定に終るを見るのみ。意志は盲目的に欲望して、

その結果、個人の意識には欲望の達せられざる失望不滿として表はる。此の不滿は即自分の意志が他の意志を犧牲にして自ら主張せんとする者にして、即ち又自己と同體の意志を破らんとする、自己否定に外ならず。』

是れ全くショペンハウエルの世界觀なり。されど此の世界觀に基きて出てたる彼れの愛に對する見は進て曰く、

『此の如くにして、深く自己を考へ來れば終に惱みより出でゝ同情とならざるを得ず。同情とは即ち意志の靜止として否定の否定即肯定を表す。』

是れ論理的に概念の言語にていひ表はされたるワグチルの愛なり。而してワグチルの事業は此の如き意志融合の愛をあらゆる人生の中に發揮し、深く眞なる人情の聲として、之を詩と樂とに現實にしたるにあり。詩と樂とを中心とする美術を以て人の眞情を發揮

し、其の眞心の改善に依りて人間と社會とを改造せんと企てしにあり。人類の墮落腐敗、歴史の無意義、近世文明に於ける趣味と同情との失落、而して此等を救ふべき宇宙の妙音、人生の眞趣なる樂詩の天職。樂劇中心の宗教教化に依りて實現せらるべき愛の合一、天眞人性の發露。短くいへば此の「宗教と美術」との將來すべき人間の再生(Regeneration)。此等の偉大なる思想につきては今此手紙に書き盡されず、君にもワグネル研究の材料を送ると共に、僕も亦他日其結果を世に公にせん。されどワグネルの福音は此等の思想考察に依りてのみ代表せらるゝにあらず、其理想の權化化身は、彼が樂劇の音と言との詩作(Ton und Wortdichtung)にあり。此詩作が耳と目とを通じて直に人の心腸に徹する愛融合の理想は、彼れの所謂る將來の音樂、將來の宗教の源泉なり。フェーンよりバルシハルに至るまで十數の樂劇につきて、一々語るは僕の力の及ぶ所にあらず。トリスタン第三

幕の憧憬に充ちたる(sehnsuchtsvoll)哀しき聲や、タンホイゼル第三幕の、タイホイゼルが羅馬行を物語る凄絶の場や、又はワルキューレ第一幕の兄妹の情味盡きざる愛の對話や、ブリュンヒルデの火に投ずる「愛の全能」や今一々君と其の印象を語り、又君と共に之をコエントガーデンの劇場に見る能はざる事、僕にとりて幾何の痛恨を與ふるや。僕は思ふ、ワグネルの樂劇は眞の哲學にして又宗教、此故に又眞の美術なり、バイロイトは實に此新宗教のエルサレムなり、竹林園なり。

此の如くショペンハウエルとニーチェとワグネルとを通觀すれば、ショペンハウエルは形而上的秘奥を發きしと共に、深く世の悲痛を敎へたり。ニーチェは此の悲痛の中に健鬪して自家の眞情を呈露し、眞價値を發揮する天才意志の尊嚴不滅を敎へたり。而してワグネルは、此の悲痛の中の意志の主張は、人性天眞の聲として慈悲憐愍の涙に充ち、安慰と至愛とを具備せる「愛」に表はるゝを見、此「愛」に依りて一

切を融合し、人生を改造せんとせしなり。彼れの愛はショペンハウエルの涅槃の如く、遠離解脱なり。されどニーチェの超人の如く、總ての苦心煩悶を經驗し、總て世の甘酸喜哀を嘗め盡し、此に依りて得たる大宇宙的意志なり。總て世の泰否、情の歡哀につきて、又思想の鍛錬や道德の進退に關して、深刻の經驗と勇猛の健鬪とを知らざる人には、眞の悲痛をも又自分の尊嚴をも知る由なく、從て此の如き人には同情なし。好惡に、信疑に、總て深入りせざる如き人心は、到底ワグチルの「愛」の福音を體得し、其の眞味眞意に徹透する能はざるべし。此故に佛家は厭離穢土に依り欣求淨土の宿善を開發せんとす。ショペンハウエルの悲痛觀と、ニーチェの意志尊嚴とは、共にワグチルの「愛」に入りて、始めて總て眞摯なる人を滿足せしむるの福音となるを信ず。此の三人には、一貫の理想あり、以心傳心底の呼吸相通ぜり。僕は此を見て此の三人の哲學或は詩作に表はれし理想(或は宗教とも美術

とも何ともいひ得べし)を、三人別々に離して見るを欲せず、之を一括し之を融合したる上に、大なる「愛」の福音に親炙せんと欲するなり。

「ゴルゴタの十字架上にかすかに聞こへし愛の吐息」も菩提樹下に養はれし大願濟度の慈心も、此の「愛」にはあらずや。總ての宗教が人生の力となる所以も、多くの思想家哲人が練りに練る考察の極致も、詩や樂や美術の人生に敎ふる所も、此の「愛」に歸着せずや。僕は此故にワグチル問題は人間の問題なりと信ずるなり。僕は此問題に逢着し、且其の中に大なる光明を望み得んとの望みを君に書き送るを以て、衷情の喜と感ず。

* * * * * *

ワグチルの事書けば書くほど盡きず、今日は此れ限りにせん。あらゆる感情の波瀾、思想の高調に同情し融化する意志は、根本は最大の愛にして、即ち是れ人間の純潔なる自由(reinmenschliche Freiheit)の發

表なり。此の愛の自由なくば、美術も、社會も、道德も、根底なき無意義なり。此の愛は形式を棄て僞善を排し、世の所謂る道德を超えたる自由鄕に於て始めて實現し得べし。吾が友よ、友情――眞の精神呼吸相通ずる友情――は此の自由を實現する直接適切の第一歩にあらずや。此故に此書を君に寄せて僕の思を述ぶ。

（三十五年五月）

ワグネルの戲曲に現はれたる戀

ワグネルの名を聞けば、人は直ちに音樂者といふことを聯想する。併し彼れの自ら期した所は單に音律を弄ぶ音樂者たるにあらずして、最も廣く又深い意味での詩人であつた。即ち單に韻文を綴るの詩人でなくて、自分の空想創意を、文學、音樂、繪畫、身振りの總合美術に依つて發表し、此大なる詩作に依つて、人間の感情の最も深く最も强い經驗を目見るべく、耳聞くべき作に現はす詩人であつた。即ち「見えるやうになつた音樂」を以て、人の心情の奥を突き、其の內に眞の人間的なる、即ち人情の粹なる同情に訴へようといふのが、彼れの抱負で、彼れは其の總合美術を以て、人心を刷新し、內心の改良に依つて人類社會の再生を促がさうといふ抱負を有つて居つた。それ故に彼れの事業を了解するためには、先づ彼れの總合美術である樂劇を研

究し、それから彼れの人類の歸趣に關する理想を窺はなければならぬ。彼れの理想とした人類の再生は、哲學者の理窟でない、活きた事業で、且つ其の事業が甚だ複雜にその一生の辛苦艱難の經歷と、彼れが創作の統一ある總合美術として活動したのである。それ故に彼れの人生觀とか或は哲學とかを、其の活きた事業から離して觀察することは、殆んど、色素を抽いて織物を批評するが如きものであり、又たとへ其の音樂や韻文の美術を言語で紹介したところで、それは色素の美を分析して織物全體の美を明かにし得ないと同じである。

併し、音樂なく、歌手なく、適當の舞臺なき日本で、ワグチルの活きた總合美術を紹介しようといつても不可能である。それといつて、此の大詩人の理想事業に就て何時までも紹介者がなかつたならば、彼れの活きた理想を同胞に知らせる機會は永久に生じて來ない。吾等はそれ故に苦痛と遺憾とを忍んで、ワグチルなる織物の地質と糸

の色合でも紹介しようと思ふ。

ワグチルの人生に關する理想は、最も大なる意味での愛、即ち吾等の精神が他の精神(神にしても或は又人にしても)と交通し、其の思ふ所、冀ふ所、勉むる所を一にし、此の同情同感のためには、如何なる犧牲をも顧みない、此の如き愛に依つて、凡ての精神が一の大なる精神の愛の内に動き、又互に其の愛を呼吸し得る狀態である。此の理想を敎ふるものは、世の道德なり、宗敎なりがあるが、此の如き愛が現實に人世に現はれ、直接に具躰的に人情に訴ふるのは、男女間の愛即ち戀で、戀は愛の最も人間的に又最も强く最も明かな愛の發表である。それ故に、目に見える詩即ち總合美術に依つて、理想の形あり肉ある發表に依つて、自分の理想を人生に行はうとしたワグチルは、殊に力を籠めて戀を描いた。彼れが戯曲に描き出した愛の内には、戀てなしに或は同情の上から、或は信義の上から出た愛もあるが、最も多く

描かれたのは即ち戀てある。

彼れの一生を通じて變らなかつた考へを形式的に述べて見よう。眞に彼我一體となり生死を俱にし得るのは戀の賜てある。男女の間の戀は固より兩性の肉慾を離れたものてはない。併し戀の最も强く又不變に發表するのは、必ずしも肉慾の程度とは伴はない。否多くの場合ては肉慾の關係なしに最も熱烈に現はれ得る戀が眞誠な戀てある。而して一定の男女の間に此の如き戀が現はれ得るのは、殆ど神秘てある、理窟や利害の打算は眞の戀を產ませないのみならず、却て之を妨げる。即ち戀は現世の利害或は善惡といふ眼から見れば、盲目的てある。此の如き戀は、それ故に多く世間の義理と衝突する、又小利害の我執に合はない。熱烈て、無邪氣て、而して眞に心の底から湧いて心を支配する戀は、自分自身の精神の內でも我執と衝突し、又世間にも妨げられる。而かも此の如き戀の人にとつて

は戀は其の生命てある、それ故に此の如き戀の最後は多くは不幸な『愛の死』即ち心中に畢る。かくいへば、ワグチルの描いた戀は、近松などのと全く同じてある、併しそこにワグチルの一の特徵がある、即ち所謂る不幸なる心中は戀の終てなくして、却て戀の命の始めてある。戀はキリストの靈と同じく生くるために死ぬもので、肉慾の死に依つて精神の自由を得るとき即ち眞の戀の始まるときてある。即ち戀は現世のみならず彼岸に永續する愛てある。ワグチルは此の考を詩と音樂とて明かに之を示すのを勉めた。もとより近松といへども、此の如き來世の信仰を現はして居ないのてはないが、ワグチル程明かてはない。近松の世話物は其舞臺を現在の社會から取つた。それ故に其の空氣が全く現世的てあり、爲めに人をして其の描いた心中の內にそれ程明かに來世といふ希望を與へしむる餘地が割合に少なかつた。然るにワグチルは其の材料をドイツの古神話から、

若しくは又中世紀の殊に十二三世紀の極めて宗教的な時代に出た物語から取つたから、其の空氣が全くロマンティックで、現世と彼岸との間の溝が左程大きくない。それ故に此の世で其の戀を妨げられ相擁して死に就いた戀人の戀も、又それ程大きな溝を踰えずして、來世につゞき得るといふ考を起さしむるに適して居る。且つワグネルの戯曲は、其の音樂と舞臺の光線の變化とで、愛の死の彼岸には尙永遠の生命があるといふことを人に感ぜしむるに適して居つた。我々の總ての思想感情をして此の世界から離れしむる音樂と我々の目をして此の世界から離れしむるやうな光線の作用とで色々の戀の最期を描いてをる。それで尙ほ強く我々に印象を與へるのであらう。

かく抽象的にいへば、甚だ興が少ないが、尙少し特別に此の關係を觀察しよう。先にいつた如く、戀は思慮分別の結果でない。戀人同

士が其の愛情を發表する方法も、亦從つて言語や言說の媒介でない。神と神と相通じて、二者が互に愛情を感ずる其の瞬間には、戀は殆んと電光の如く突然で、而かも抵抗すべからざる感動を與へる。此の事は心理的觀察としても多くの人の經驗する所であらう。隨分世には理性的の愛などいふことをいつて、それが何か高尙なるものゝ如く考ふる人もあるが、此の如き戀は餘り利巧すぎる戀であつて、眞個に熱烈なる戀の本能的性質を現はしたものではない。ワグネルは思慮や利害を交へない、純粹の戀を描かうとしたから、殊に電光の如き戀の發作を描いて居る。其の戯曲は殆んど盡く戀人が相見えた其の瞬間に愛の電光に打たれたやうな始めに始まつてをる。只一つの例外は、タンホイゼル(Tanhäuser)とエリザ(Elisa)との間の戀である。併しこれも理窟から出たのではなしに、只兩人が同じ城中に住んで居る間に漸次感じて來た戀である。其の反對で最も突然なる戀の

發表を描いたのはトリスタンである。

トリスタン(Tristan)は自分の叔父なる國王のためにアイルランドを征服した。其の戰にアイルランドの王女イソルデ(Isolde)の許嫁なるモロルドを殺した。彼がモロルドから受けた傷を癒すために收容せられた家は、即ちイソルデの家であつた。イソルデは自分の將來の夫を殺した仇であるトリスタンを殺さうと決心した。決心を實行しようとする其の瞬間に、トリスタンの無邪氣に、又收容せられて居る家人を信用して一點の疑懼をも挾まない、天眞爛熳の眼光に射られて、こゝにイソルデは何とも知れない感じを得た。此の時には兩人ともそれが戀であると自覺しなかつたのではあるが、後に此の戀が開發して、遂に二人の不幸を招くに至るのである。兎に角二人の戀の始は二人自らも知らない、一瞬間の神秘的感動であつた。第一幕目の船中の場で、イソルデが侍婢に此の瞬間の感動を回顧し

て物語る場の音樂は、殆んど此の作中の絶唱である。戀の味を現はした音樂の內此場の音樂と、ワルキューレ(Walküre)の「戀と春」の音樂とは殆んど古今の絶唱であるが、一瞬間に起つた戀の感動をかくまで深く味はつて音樂に現はしたワグネルの技倆は、即ち彼れの戀に關する深い同情から來たのである。

先にいつた如く、タヽホイゼルの外、ワグネルの戲曲に於ける戀は、皆一瞬間の感動から生じて居る。それならば、かくの如き突然の愛は偶然に出たかといふ疑問が起るであらうが、此の點についてワグネルの愛に關する神秘的信仰が現はれて居る。即ち愛なるものは凡ての精神に深い根底を有して居る。いはゞ宇宙精神の根底から湧いて出る精神の交通である。戀人が一瞬の間に不可思議の感動に動かされ、それが爲に一生の運命を棄てゝ了ふが如きは(君が一夜のなさけの爲には、妾が百年の齡をも捨てんといふ、東洋の常套も此

と同樣である)いはゞ宿世の緣、即ち先天の冥契である。ワグネルは此宿緣を色々に描いて居る。ロヘングリン(Lohengrin)とエリザとの戀は、エリザの無垢なる信仰と、ロヘングリンが信仰の人を護る天職との冥契である。「飛び歩くオランダ人」(Der fliegende Holländer)とセンタ(Senta)との戀は、オランダ人自身の先天的運命と、センタが豫て憐むべきオランダ人の運命を詠じた歌と彼の肖像とによつて見ぬ戀にあこがれて居つた結果である(見ぬ戀が憐みの同情で如何に高めらるゝかを考へよ)。ワルキューレに於けるジーグムンド(Siegmund)とジーグリンデ(Sieglinde)との戀は、彼等兩人が双生の兄妹として將來の世界の勇者ジーグフリード(Siegfried)を生むべき運命を、神から與へられて居つた結果である。「神の微光」に於けるジーグフリードとブリュンヒルデ(Brünnhilde)との戀は、運命主宰の父なるヲータン(Wotan)が自分の養女ともいふべきブリュンヒルデを罰する爲に永き眠りに

入らしめた前に、彼女に約束した結果、又神の城であるワラハラ破滅の後に諸神が凡て死んだ後にも、猶二人の愛に依つて神の力が此の世に存在し得るようにとの、豫ての結構から出た結果である。

此等の物語は、一々其の詳細を述べる必要もあるが、こゝでは兎に角、ワグネルが突然の感動から起つた戀も先天の冥契があるといふ信仰を有つて、其の多くの戯曲を作つたといふことを述べるに止める。それ故に、此等の宿緣を描く場合の音樂は先にいつた二つの場合の音樂に次いで、戀の力が如何に強く不可抗的であるかといふことを知らしむるに足るものである。センタがオランダ人に關するバラッドを歌ふとき、ヲータンがブリュンヒルデを眠に入るゝ前、彼女の將來の夫には世界一の勇者を與へるといふ約束をするとき、即ち「ワルキューレ」の最後の音樂、此等について日本では其の美に接することの出來ないのを遺憾とするといふ外ない。戀は不可抗の壓力を

以て其の魔力の蹄系にかゝつた人を動かす、彼等は之がためには死をも辭しない、否喜んで戀の死を遂げる。況や世間の是非や義理の束縛をや。彼等の戀は世間と衝突する、世間道德の力は社會といふ後立を有つて居るから戀人を寛容しない。彼等は是に於て世間の義理と衝突し、それが爲めに死ぬ。併しながら彼等の戀は死のために其の終を告げない、ワグチルは種々の方法で戀の永遠の生命を描いて居る。今少し其の筋を物語らう。

戀は世間の義理に妨げられる、其の妨げをも顧みず、至心至誠、相愛する男女の心は即ち一切の善惡を超絶した狀態ではあるまいか。ワグチルが殆ど初めての傑作である「飛びあるくオランダ人」は、即ち世の風波にゆられ、人の間に容れられず、恐るべき咒詛運命の犧牲となつて居る憐むべき男が、自分の身命を捨てて戀に忠實な婦人の愛の力で、其の恐るべき運命を解脫する悲曲である。其筋の大略をい

へば、或る神の咒ひの爲に、人の仲間にも入れられず、永久海上に漂泊するオランダ人があつた。七年に一度は上陸して結婚までするを許されたが、若し其の婦人が死んでも此の男に忠實であつたなら、其處で此二人は死んで、憐むべきオランダ人は恐るべき運命の終りをなすといふ話しがある。ワグチルは此の話しの中の運命なる者の中に、拔世の才が多くは(彼れ自らも亦其の一人)世間から受ける虐待の運命を見、又その人の爲めに身を棄てて悔いず、世間の利害や人の褒貶を顧みず、戀に忠實な婦人に於て理想の婦人を見た。ノルエー船長の娘であるセンタは豫て此のオランダ人の運命を歌つたバラドを歌つて、其人を憐み又其の肖像なる者を見て、見ぬ戀にあこがれて居た。父がオランダ人をつれて歸つて、センタは滿身の愛を以て此のオランダ人に忠實ならんと決心した。オランダ人が此の少女を恐るべき運命の渦に入れまいと思つて、否此の少女も亦到底死し

て悔ひざる戀の人ではなからうかとの疑を起して、自分一人で船に乘り出す。センタは其跡を慕つて直に入水する。其と同時にオランダ人の船は破れ、須臾にして二人は肉躰以上の形で相擁して空中に現はれ、彼等は現世の羈束と人間の運命とを脱して、永久に戀の合一に入る。此曲の哲學については論ずべき事もあるが、兎に角、此は戀が人に現世以上の生命を與ふるといふワグネルの敎である。

ロヘングリンとエリザとの戀は、國王群臣の歡呼の内に成就して、兩人は結婚式を擧ぐるに至つた。然るにエリザが父から相續した領地を奪はふとする惡人が、隙を狙つてエリザを煽動した。元來ロヘングリンは半人半天のグラールの世界から來た護敎の武士で、人間世界では故郷や名を語ることを禁ぜられて居る。エリザとの結婚の約束をする時にもエリザが此事を問ふてはならぬといふことを條件として置いた。然るにエリザは惡人に唆かされ、又人の常情

として、自分の夫の故郷姓名は他の人には兎に角、自分には告げてくれさうなものといふ考から、遂に始の約束を破つた。是に於てロヘングリンは人間世界を去らざるを得ないようになつて、兩人の地上の戀は破れた(此の話しの哲學的解釋は今之を畧す)。ロヘングリンの去つた後、エリザは其の夫の姿を望んで呼吸を引取り、其の靈は夫の故郷なるグラールの國に向つて去る、彼等の戀は其の半人半天なるグラールの國に於て遂げた。此の場合では兩人の戀は人慾のために現世では破られたのである。

タンホイゼルとエリザベトとの戀は、エリザベトの叔父なる侯爵の許しを得て居り、人界の戀も成就しやうとしたとき、タンホイゼルが肉慾の奴隷となつて汚れた魔界に這入つたゝめ、不義の淫慾を排擊する當時の宗敎的な人々のために排斥せられて、後悔の後、エリザベトの望に從つて、法皇の玉座の下に罪障消滅を求めにいつた。エ

リザベトはタンホイゼルの罪が法皇より赦免を得んことを聖母に祈つた甲斐もなく、赦免が得られなかつたことを聞いて、死んで了ふ。タンホイゼルも、元の戀人の死を見て、眞心罪を悔ひて死んで了ふ。兩人の死骸が相接して地上に横はるとき、ローマから還つた巡禮が法皇の赦免狀を持つてエリザベトの祈とタンホイゼルの悔悟とのために、ローマに、奇蹟が現はれたといふことを報知し、其の讃美の歌の靜かな聲の中に幕が下りて兩人の死は、即ち兩人の淸い戀を成就せしめたことを餘韻嫋々として感ぜしむる。

トリスタンとイソルデとは前にいつた如く、アイルランドで病床看護の時に既に互に戀にかゝつて居つた。併し彼等はまだ十分之を自覺せず、又世間の關係に妨げられて互に意中を明かす機會を得なかつた。然るにアイルランド征服の結果として其の征服者たる人、即ちトリスタンの叔父マルクがイソルデを女皇にすることにな

つて、トリスタンが其の迎への使になつた。イソルデは一は敵國に人質の如くにして娶らるゝを怒り、又一はトリスタンが先きには己れに優しくながら、今は敵國の使として、而もイソルデの意中の戀を踏付にして、自分を迎へに來たのを怒り、己れも亦た彼にも毒藥を飲ませて共に船中で死なうと決心する。イソルデの侍婢が之れを知つて、毒藥の代りに戀の藥を飲ませる。是に於て兩人の戀は明かに兩人の精神を奪ひ、彼等は奸通の罪を犯して其の戀を遂げようとする。此の曲の二幕目の夜の密會の場は、即ち兩人が世間の義理道德を振りすてゝ少しの憚りもなく互に其の戀を語る場である。ワグネルは世間の義理を晝に比し、戀を夜に比し、外面を粧ひ見えを憚る光の奴隷は、即ち世間の道德で、眞心を打明け何等の隔も差別もなく凡ての物を一つの暗黑の中に包む夜は、即ち戀てあるといふ意味を兩人に歌はせて居る。此の作はワグネルの中年の作でもあり、文辭

に於ても音樂に於ても彼れの作の上乘である。此曲、殊に今いつた第二幕は、ワグネルが最も力を籠めて世間の義理に對して戀の力を發揮したものであるから、世の道德家の中には大に攻擊を加へる人もある。其是非の評論は別にして、兎に角トリスタンとイソルデとの戀は、此の如く法律道德を蹈み付けた其の結果として、トリスタンはマルクの從者の爲めに刺され、後遂に其の傷に死ぬ。イソルデは其の跡を追ふて死んで行く。兩人の死骸が相重つて古城の内に横はつて居る處にマルク王は來つて、兩人の戀の事情を、先に戀藥を飲ませた侍婢から聞いて知つた結果、兩人の罪を赦し、且つ兩人を夫婦として之に國を讓らうと思つて來たが、一刻遲れたゝめ遂に兩人の死に後れた。兩人の魂の行方は文辭にも音樂にも現はれては居ないが、兩人の死は即ち彼れ等の希ふた夜の中に彼れ等の戀を包み去つて、其の戀は甚の光を憚る事を要しない樣になつた。

次の例は、又奸通に關係ある者である。ワルキューレに於けるジーグムンドとジーグリンデとの戀は、先きにつた如く、兄妹の間の戀である。兄妹の戀といつて其の點では當時の考にしては何等の不倫ではない(古代の說話に其例は多い)。兩人は同じ親に生まれて、其種族の子孫が世界の統一治平を現實にすべき神意に依つて生まれた。然るに妹のジーグリンデは犬族の長に捕はれて、肉躰のみは其の妻となつて居た。其の後或る春の夜に、兄なるジーグムンドは犬族との戰爭に負傷して敵の家とも知らず、犬族王の家に逃れ込んだ。留守を預て居つたジーグリンデは遠客厚遇の風俗に從て、此の負傷の人を兄とも知らず厚遇した。其の兩人が互に相見た瞬間に、兄妹とは思ひも及ばぬ兩人の間に戀が成立つ。忌むべき夫の壓制の爲に服從して居る妹が兄とも知らぬながらに、目つき顏つき己れに似通ふた又負傷して助を求むる男に好意を表し、又情ある武士が負傷困

厄の際己れを厚遇してくれる美人に對して、愛情の一端を感ずるといふことが何の不思議であらうか。犬族王が歸た後彼とジーグムンドとは互に敵なるとを知つた。併し中古の遠客厚遇の風俗に從つて、二人は翌朝此の家の外に於て決鬪しようと定めた。犬族王の妻なるジーグリンデは、自分の夫に對する反情を增進し、それと反比例に負傷の人に對する愛情は其のまゝにしては默過し難きに至つた。ジーグリンデは夫に痲醉劑を與へ、其の間に此の負傷の人の處に來て、自分の境遇を訴へ、二人の戀は明かに其の力を現はし來て、兩人は互に其の眞情を打ち明ける。先に述べた「戀と春」は此場の歌であつて、二人は春の夜風に開かれた山家の窓からさし入る月の光に照らされて、冬は去り、春は和き月光、と共に來て、戀にやさしきを歌ふ。兩人は互に兄妹であるを知り、又兩人の間に先天的に夫婦の約束のあるのを知り、且つ此處に父が殘して置いた名劍を得て、兩人の緣は父

の劍によりて結びつけられて、世間では奸通と稱せらるゝ罪を犯して犬族王の家を逃げ出す。兩人の奸通に同情を表する運命の神ヲータンも、其の妻なる女神が此二人の不義を彈劾して止まないために、自分の意思には背きつゝ現世での此の不義を罰することに決心する。其の結果として奸夫なるジーグムンドは犬族王のために殺され、姦婦なるジーグリンデは一夜の契りに依て姙むだ男子を產んで死んで了ふ。つまり兩人は奸通といふ罪名の下に心中の死を遂げたのである。兩人の死後、其の間に生まれた子、ジーグフリードが如何なる運命を有するかは後に語らう。兎に角、兩人が奸通の罪を犯しつゝ、相擁して山間の一ッ家に春(男)Lenz と戀(女)Liebe との合體を歌ふ。其の聲器兩樂は、先きにいつたトリスタンの密會と相並んで、若しくはそれよりも一層勝れて、最も表情に富んで居るワグネルの最大傑作である。

この兩人の間に生まれたジーグフリードは、主宰神ヲータンが、此男の子の兩親に望んで居つた世界經營の事業の後繼者である。而して此のジーグフリードは、ヲータンの養女ともいふべきブリュンヒルデと戀をすべき運命を定められて居つた。ニーベルンゲンの第三曲「ジーグフリード」の終は、即ち此の二人の戀を結びつける場で、前途の樂しき望と恐るべき運命とが二人の相抱いて接吻する一刹那の器樂に現はるゝ場である。これから以後、此の二人の戀が人間世界に於ては、破ぶらるゝに至るまでの成り行きは、即ちニーベルンゲン第四曲の筋で甚だ複雜であるが、要するに、ジーグフリードに宿怨あるものゝ奸策と、ジーグフリードを戀する他の女の熱心と、およびジーグフリード、ブリュンヒルデ兩人の少しく注意を缺いたためとで、即ち簡單に云へば、人間世界の色々の弊害や惡德の爲めに、結局ジーグフリードは自分の戀人と仇とのために殺され、其の戀人たるブ

リュンヒルデは戀人の死後、彼れの純潔なる精神を知り、彼れの愛情の奥を知り、再び新にせられたる燃ゆるが如き愛情を抱いて、戀人の死體を焚きつゝある其の火に投じて自殺する。此がニーベンルゲンの曲の全體の最後である。此のブリュンヒルデの自殺に先たちての獨誦は所謂る「愛の全能の譜」てワグネルが戀即ち愛なるものが如何なる力を以て居るかといふ、宇宙人生の最大神祕を音樂に現はさうとした最大の表情を有つて居る一曲である。二人の戀人は此の如くにして死し、主宰の神たるヲータンは其の居城なるワラハラを燒いて、諸神は此兩人の戀人と共に悲壯なる最後を遂げる。其の世界末日の光景は舞臺の面に赤き火の光として現はるゝが、其の最後のオルケストラ全體の力あるクレッセンドは二人の戀の力の世界の破滅にも關せず、如何なる永遠の力を有つて居るを悟らしむるに足るものがある。

ジーグフリードとブリンヒルデとの戀の最後について、尙一つ大に注意を要するは、彼等の戀に伴ふ惡み、卽嫉妬が彼等の最後に至らしむる原動力の一であるとである。蓋し愛のなき憎み、憎みなき愛は兩つながら眞の愛又憎みでない。旺盛なる愛の裏面には「愛するが故に憎む」といふ一面がある。人は此の憎みを嫉妬と稱して惡德の如く云ふが、眞の嫉妬は人間世界に於ける愛の他の一面である。其れ故他方で憎みなき愛といふ者は決して熱誠の愛とは云へない。此消息はキリストが「我は平和の爲に來らず」といつた事、又た日蓮の攝折二門にも明かに現はれてをるが、其の理論は他の機會にまとめて申し述べよう。兎に角「神の微光」では先のトリスタンと同じく憎みの情が戀と共に著しい。ブリンヒルデはジーグフリードが己れを欺いた、己れの愛を裏切りしたのを怒り、終に彼れを殺す助をするに至つた。此の如き憎みも畢竟愛から出た憎みである。其れ故に

「愛の全能」に於ける歌詞は明かに此心情を歌つてをる。『彼れほど眞實であつ人はない、而かも彼れの如く己れを欺いた男も亦ない。我等の戀は此の裏切りによりて堅くせられた。彼等二人の戀は、金にもまさる神の位も、盟も及ばず、苦樂の中に世の則を超えて。見よ北光の聖なる焰の中に輝けり』。

此の如く戯曲の筋を抽象して話しては全く織物の美を見せずに其一々の糸の色を說くが如きもので甚だ心苦くは感ずるが止むを得ない。以上述べた如き戀の宿緣、戀の運命、戀の力、戀の最後はワグネルが其の總合美術に依つて看者の前に活けるが如く直接に耳目に訴へた空想といはうか信仰といはうか、兎に角彼れの戀に關する理想の發表である。而して彼れの戀なるものは世人のいふが如く浮いたような青年男女の戀ではない、森嚴なる意味で、人生の最大活動力と爲り、悠遠なる意味に於て、人間の最大の望となり、而して最も

本能的に人生の三世に亘つた生命の泉である戀である。其れ故に、ワグネルが戀の死を描いたのは、死を目的としたのではなくて、死しても悔いない程熱烈なる誠ある戀を以て人の心情をつく爲めなのである。不惜身命は死の福音でなくて實に生の福音である。

ワグネルの世界觀では一切萬事凡て愛である。而して戀は此の愛が最も現實に人生に現はれた發表である。彼が此の戀を描いた戲曲即ち總合美術の發表(單に娯樂のための演劇やオペラや乃至詩歌繪畫ではなしに)に依て人間改造の大福音を成就しようと試み又得ると信じたことも、或は過信であるとしても、彼が人生に於ける戀の力を發揮し、社會に於ける男女の戀を理想通りに、勇壯に眞摯に又た熱烈ならしめんとした、其の自信と勇氣と、且つ又其の總合美術の技倆とに至ては、兎に角十九世紀の俗文明の間に於ける最も注意すべき現象ではないか。

我々はワグネルの戀を擴し廣め、又其に基いて總て人間の精神が同一體になり、其愛を人間生活の中心にしなければならぬ。それを單に空想として論談し、或は理窟として議論するばかりてなしに、恐らくは何人と雖もそれを聽いて感動を得べき、謂はゞ萬國普通の言語てある、誰でも感ずべ音樂、誰でも見得る繪畫美術等總ての方法を以て人心を感化したいと思ふ。是等の戲曲を直ちに日本に行はうと云ふ場合には隨分困難もあらうが、ワグネルが此の總合美術を始めた辛苦に比せば小なる者である。而して吾等は已に何人の肺腑をもつき得る利器を與へられてをるてはないか。(卅六年十月)

演劇の使命

藝術は神聖である。吾々の精神を感化し、人世をして高尚ならしむる、偉大の力を有して居る。藝術が神聖である以上は、又藝術家もその覺悟を有つてゐなければならぬ。又次いではその藝術を享樂するものも、是に對して神聖なものであるとの覺悟をば、有つべき必の要がある。凡ての藝術についての外、今述べるのは殊に藝術中の藝術である演劇である。

世界の歴史上、何れの國でもその當初演劇は神樣の前で催さるゝもの、即ち神事として行はれたもの。之を觀る人も、この神事の演劇に對して、神樣を信仰するの念を高かめ、その神樣の事蹟を拜觀しつゝあると同時に、自らその演劇に同化し、その曲中の神となつたほどの感を抱きつゝ、見物したので、彼等は、何か、もしくは幾分か、此演劇に

因つて神の力を得たといふやうに感じた。全世界における演劇の起原は何れの國も皆、宗教上の儀式にあつて、就中宗教上の儀式と演劇との關係の、最も明かにして最も組織的に出來て居るのは希臘である。

希臘の古代には、神事の演劇を「ミステリイ」と稱して之を見物する人は一定の資格のある人でなくては、許されなかつた。一定の資格とは、まづ身躰、罪障等を洗滌する、所謂拂淨の儀式を行つた後、段々と彼方此方の神社に參詣し、其等の殿堂で、或は神前の供物を頂いて喰べ、或は最も秘密として取扱はれて居る神樣の記標(希臘の神々は、多く神一個々々の記標として、或は蛇或はその他の動植物などを持つて居る、その記標)の拜覽を許されなどして、さて一定の程度まで神聖になつた人ばかりでなくては、かの神事の演劇を見物する事を許されない。

而してこの「ミステリイ」はその名の示すが如く、最も秘密に行はれたもので、此の演劇を觀た人々も、大體のことの外は一切他言を嚴禁したものである。此の樣に、最も神秘不可思議なるものとしてこの劇を執行されたので、見物したものも他に言ふを憚つて居るから、その詳細に就ては後世に到つて知る事が難いが、種々の方面より推測して、かの「ミステリイ」なるものは、頗る莊嚴に行はれたものといふ事が證據立てられる。

かの一定の資格を有し、演劇の拜觀を許されたものは、九月下旬の闇の夜に、一同集つて靜肅に行列を作り、アゼンス市のエリユシオンの前まで練つて來る。元より闇夜の事ではあり、照らすものも持たなければ、一點の光明を四隣に認むる事の出來ぬ中に彼等は行列するのであり、且つその集る者は謂ふまでもなく、拂淨やその他あらゆる儀式を經て來た人のみゆへ、彼等の信仰は漸く篤く、その神秘的感

情は、漸く高まつて、精神はこの世以外に馳せて居る。さて彼等の一行がエリユシオンの前に集まると、正面の扉は左右に開き、この時一道の光明が中に輝いて、此の光りに照らされて一行は場内に入る。その入口には金色燦爛たる鎧を着けた番兵が、二人立つて警衛して居る。入口よりして、行列の進むと共に、正面なる演舞場は更なり、場内には燦爛たる光明輝いて眞晝の如くで、先に闇中を進み來たのと違つて彼等一行はこの光明の中に包まれて居る有樣である。

その舞臺の裝飾は恐らく、當時希臘國に有名なる畫家彫刻家の妙手に成つたもので、彼等妙手が力を盡し伎を揮うた繪畫彫刻をば、掛け列らねてある、その美はいかほどであつたらうか。とある間にエリユシオンの神官長ヒロフアントが舞臺に現れ、頗る莊嚴な調子で、說敎の如くに是より始まるべき神曲の事を宣言する。さて始まる演劇は勿論希臘の神話古傳を脚色したもので、その演劇脚本は當

代第一流の作家の手になり、舞臺で奏せられる音樂は是亦當代に有名なる音樂家の司る所である。かくの如き演劇が演ぜられるのであるから、その見物は勿論今日の如く、只芝居を見るといふのではなく、彼等自身既に天上世界に入つて、目前に神樣の爲さるゝ事を拜觀するといふ感情を以てした。單に見物の一行のみならず、この舞臺に現るゝ俳優、音樂家、其他の者も謂ふまでもなく凡て一度はその神聖な儀式を經て、皆神に近く化り居るものばかり。即ち舞臺演劇そのものゝ最も美術的に出來て居るといふばかりでなく、俳優音樂家、見物皆悉くその撰擇を十分にしたものばかりであるから、雙方悉く熱誠なる信心を以て演じ、且つ觀たのである。

當時そのやうな「ミステリイ」を行つた目的は、畢竟その儀式を經て劇場に入つた人達が、それに因つて神樣の事を知るといふに止まらず、それに依て神樣の力を得て、死後の幸福を得るといふ信仰を有

つて居たのである。かくの如き演劇こそは、正當の意味で神聖なものであるし、また頗る莊嚴なものであつた。

他の國でも、隨分演劇の神事から出たのも多いのであるが、希臘ほど宗教的にも、また美術的にも、完全な組織を與へたものは、比べるものを他に見ない。

歐羅巴の演劇は、概してこの希臘の神曲「ミステリイ」から出たものであるが、中世以後はこの演劇の神聖であるといふ觀念が、段々消滅して來るに從ひ、見物する者は勿論、俳優、作者共に自身の信仰を表す爲めに演ずるのでなく、また彼等自身の精神を是に依つて滿めるといふ覺悟の人がなくなつて來た爲めとて、俳優は漸く技藝の練習も纖巧になつて、見物を面白がらせるといふ事が重になつて來た。それてあるから、從來一つに歸して居つた美術と演劇とが、互に分るゝやうになつた。

近世にかのワグヂルが所謂集合美術に依つて、演劇を作り出し、脚本を自ら創作するのみならず、音樂も自身の頭腦から出て、また舞臺上の裝飾等凡て彼一人で考へたので、茲に統一のある集合美術を作り出した。而してワグヂルはその戯曲を單に娯樂の具として用ひたのではない。一層進んで演劇なるものは人間の墮落を救ふべきものであり、また現在の墮落して居る人間に、復活を與へるものであるとの抱負を有つて居つた。それ故ワグヂルは俳優を選ぶのには大苦心をしたので、ワグヂルの戯曲は唱ふものばかりであるから、中で勿論美音家の卓絶したものを撰び、それも單に美音を發するといふばかりでなく、人物と美音との全く揃つて居るやうな俳優を得やうとして、痛く苦心をした。ワグヂルの抱負は、茲に神聖なる戯曲を再び興さうとし、まづバイロイドに一劇場を設け、是を以て世界宗教の中心となし、且つ古代希臘なるエリユウシオンを復活しやとの考

へに出たものである。そのバイロイトの劇場を稱して、單に劇場と言はず、"Festspielhaus" 即ち祭りの儀式を行ふ劇場と稱したてのも、蓋しこの大抱負に因むのである。

さてこの如きワグヂルの抱負が今日のやうな物質主義の世界で、直に實行せられ得るか否かといふ事は隨分疑問であるけれども、兎に角、人間の歴史から之を見るに、演劇は神聖なるものであるべき筈で、而かも段々それが、神聖でなくなるのが近世の姿である。極めて近い例にした所で、古代の祭儀と申せば、日本の祭の如く、昔は大切に行つて神聖な祭であつたものが、今日祭儀と言へば、却つて神聖といふ意味の事は少く、人々が此祭日を以て且つ樂み、且つ飲食するといふやうになり來つた。かの英語に holi-day は holy day の意で即ち神聖な日といふ事であつたのが、今日では只休み日の意味に轉じて來たやうな有樣。是と同じく日本でも儀式といふ事は嚴肅なる式をば

精神を盡して行ふ事であつたのが、今日では單に形だけをする事になつて居つて、極めて眞面目に心底からその儀式を行ふやうな事はなくなつたのである。俗語にも、本の儀式だけに行ふといへば、本の形の上だけで、心を盡すといふ事もなく行ふ意味である。然しながら古代にあつては中々そんな事ではないので、儀式こそ人間が最も大切のものと思ひ、且つ現當二世に亘る大事として之を行つたのである。

儀式は眞面目で、神聖であつたのが、藝術一躰は更にも言はず、中に演劇も同じこの傾向に支配せられて、今日の有樣とはなつた。是は實に文明の勢が然らしめる、止むを得ざる事としても見られやうか、然し一方から觀察するに、今の世界の文明は所謂る物質的文明であつて、その物質的文明の唯一の道具は即ち生存競爭である。人間は此の生存競爭の爲めに逐はれて、殆ど精神上の餘裕が無くなつて

居る。この物質的文明の弊害は何に因つて、救はるゝ事が出來やうかといふに、まづ藝術に依るのが、一番の近道であると思ふ。殊にあらゆる美術を集め來つた演劇が、この文明の弊害を矯正するもので、之に依つて人々の精神に餘裕を與へ、又内に深く自ら顧るやうにする一番仕易い方法であらう。

然らば所謂藝術はいかにすれば、根本から人々の精神を感化し、心を作り直す事が出來るか、その感化すべき力はどういふ神秘に基いて居るか。その根本の議論に就てはしばらく別にしても、兎に角一寸考へた所で、今日の人心を救ふに最も簡易なものは、演劇に如くものはない。『救ふ』と言ふのが大袈裟ならば、少くとも人心に餘裕を與へるの機會を作り出すものは、演劇であらう。

そこで見物の方は別にしても、その演劇を組織すべき俳優なり、また作者等も、よほどその考を有つて貰ひたい。即ち演劇を宗教的に

見るといふ點は兎に角少くとも自ら、社會の教育者となり、はた物質的文明の弊害を救ふべき、救世主であるといふ覺悟を以て、凡ての困難を排斥してそれを實行したい。それに就ても舊演劇の弊を破つて、新しい演劇を始めやうとする人に對しては、一時の成功と不成功とを措いて、演劇は神聖なものである、自分達は演劇を以て神聖なる空氣を社會に傳播する教導者であるといふ意氣組を有つを望む。その遣り方に到つては、よしんば希臘の「ミステリイ」時代の如き演劇を見る事は、出來ないといたした所で、かのリグチルが企てゝ、幾分か成就した位の程度ほどに進んで、見物をして襟を正しうして演劇を見せしむるといふやうにする事は出來やう。又さうなれば演劇の社會に及ぼす勢力も非常に加はつて來て、劇場は學校や寺院よりも大切な社會感化の場所となる事が出來やう。要するにその根本に於て必要なのは、俳優作者共に大なる覺悟を定め、而して益々修養を

加へてその覺悟に向つて奮迅の勇を現はす事が凡ての演劇を改革する根本である

（卅六年十一月）

久遠の女性

(女性に對する佛教と基督教)

現實の世界は吾等の耳目に觸るゝまゝでは、皆生滅の相である。今迄あつた者は消えて行き、今考へてをる事も次の瞬間には忘れる。然し總ての事物が耳目に觸るゝだけの生滅で、その奥底には一物を留めないといふ事は、吾等の如何にも本意なく感ずる所。のみならず事實生滅の裏に常住の何物かが存在してをる事を知らしむるに足る根據がある。蒸發した水は水としては見えないでも蒸氣として空中にある。解躰した身躰は有機躰としてはそこに存在しないでも、化學的元素として永遠の存在である。意識にはなくなつた知覺や感情でも記憶の中には存在してをつて、折に觸れては再び意識に現はれる。此等の事實は總て現實生滅だけが世界の實相でなく、

感覺に觸れ意識に現前する事物以上に、何かまだ實相の世界がある事を吾等に示す。

美術の人々が現實の中に理想の美が現はれてをるのを發揮し、哲人聖者が現世以上更に永遠の世界あるを示したのは、その基く所は、今述べた如き事實を根據として推論したのでなく、かれ等は天賦の直觀力や悟道でこの理を自得したのである。然し此の如き事實の存在は少くとも、美術家の理想や、聖者の常住光明界の必しも全く空想でない事を指し示しては居ないか。且つ又美術や宗教の理想界がその基く所は何であるにしても、吾等の精神にそれだけの勢力を及ぼし實力を有するのは事實で、通常の人が雲烟過眼する萬象の中に、美の理想を捕へて之をその作に現はし、美趣こゝにありと教へてくれるのが美術家詩人である。その美趣に依て吾等は今までは耳目に觸れなかつた理想を現象の中に感じ得、その感じに動かされ、そ

こに新なる生命の源泉を得る。又宗教であれば總ての人が現實五感の快樂や努力のみに滿足して、現象の相を追ひ生滅の羈絆にからまれて居るのを喝破して、吾等の生命は現象よりも深い又廣い根柢に据つてをる、吾等の幸福努力は生滅流轉の界よりも一層永遠なる常住の光明によりて得らるべき事を開示してくれる。現實のみに滿足して、知識の上でも希求の點でも、現世の外に出づる事を求めない人にとつては、此の如き美術や宗教は無益の空想であらう。假令ひ空想でも無用でも、兎に角、美術や宗教の力と必要とはこゝに存する。美術や宗教が現世の生活、世間の實利に無用であるや否やは茲に別問題としても、この理想を發揮し、永遠の常住相を以て人心を感化するのでなければ、美術や宗教は成立しない。現世的宗教などといつても單に現實で滿足するのではなからう。如何に寫實的美術でも現實の中から一つ理想の美趣を發揮しなければ、それは美術で

はない。

現實の裏の理想、生滅以上の常住。これが美術と宗教との契合、又生じては消えて行く吾等の現世生活の中に根柢源泉から湧き出る久遠の生命を與へる力である。ラファエロが「美しき園守」をマドンナとして畫いた中には、園守は肉身生死の一婦人のみでなく、其中に美はしい母の子に對する慈愛と、其慈愛を圍んでをる美はしい花園の天然とが永遠の理想として畫かれてをる。彼が畫幀に對して抱いた其のコンセプション、畫幀の中に現はした理想は、人心の靈が滅しない限り、人心を感化し得、又同じ理想が他の美術家の手によつて他の形で發揮せられ得。文天祥の正氣の歌は、かれが感得し又體現した天地の正氣として永く人を動かし又人を活かし得る。今日の科學主義の人は、此の如き正氣といふ樣なものは存在しない、物理や化學は正氣などのないのを證明するといつて、正氣などといふ考へは

一片の詩的空想だと貶するであらう。然しながら六百餘年の前に文天祥を活かし、又その口に詠ぜられたその正大の氣は今日も尙吾等を動かし吾等を起たしむる力を有してをる。そこに物理學者の天秤にも上らず、天文學者の望遠鏡にも入らぬ何物かが活きてをる。佛陀が世事流遷總て常なきを嘆じ、人生總て苦惱の種に充ち、人身は醜穢膿汁で出來てをるのを敎へたのは、單に無常悲哀を敎へる爲めでなく、その無常の裏に永遠の光あり、悲哀の世相以上更に常住の妙樂を得しめんが爲めであつた。それ故に佛陀は自らその悟得の佛性菩提が久遠實成の妙法に出たのを明かにして、「吾れを聲のみにて、きく者はわれを知る者にあらず、吾れを形のみにて見る者は眞の佛陀を見ず」と誡めて、若し人あつてその久遠の佛を自分精神の中に如來として、現前の佛陀として得て之を信ずるならば、その人は不空不滅の生命を得るといふ福音を傳へた。即ち肉身の佛陀の中に久遠

の佛性を信ずるのが佛敎の信。キリストが「今日は野にありてあすは爐に投げ入れられる菫の花」一つにも神の遠大なる普遍なる攝理の現はれてをるを敎へたのも此と同じ精神。禽鳥は自然にして空に飛び、麋鹿は自らにして溪水に就く、その天然の中に大なる常住の生命が現はれてをる。鳶は天に上り魚は淵に躍る、その中に永遠の大精神が現はれてをる。吾等は過去の事を愁ふるに及ばない、明日の事を愁ひ煩ふ要がない。今日現前の事々物々の中に普遍不枯の生命が現はれてをる。「今」の一瞬に三世を蔽ひ盡し得る。理想は決して彼岸でない、永遠は決して遠隔でない。一旦理想の眼に映じ來つたなら現實は皆永遠の理想である。世人の執着偏見してをる現實は生滅の世界であるが、現實の中には總て久遠の意味が包まれ、それが理想の心眼に映じ來て發現し、又何れの人をも動かし得る力を有して居る。此の理想を發揮して人を感化するのが即ち美術であ

る又宗教である。

さすれば宗教家(並に宗教的美術家、詩人)の眼で見れば、世の中に一つも偶然といふ者はない。一時生じて一時滅し行く外に何等の根柢も何等の意味もない者はない。何物も何事もそれ〴〵の根柢を有して、その生滅出沒以上更に永遠の實相を有してをる。其實相が三世に亘つて不變であり又恒に活きてをる。出沒の現象とは即ちこの久遠の生命の一つの現はれである。それ故にその實相を求める理想の眼は、總ての事物の中に久遠の生命と深遠必然の意味を發見する。佛教ではこの實相を「法」即ち達磨と名ける。絶對の覺者なる佛陀に發揮せられ說破せられたる「法」であり、又その「法」は即ち萬物起伏の根柢であり、生命の法である。キリスト教では之を同じくロゴスと稱する。萬象の父、生命の源泉なる神がその觀念を直に事象に現ずる「ことば」であり、觀念であり、又力である。この二つの大宗教

は不思議にも(然し又必然の結果)相隔つた地方に起つて、同じ方面から萬物の實相を達磨 Dharma 又はロゴス Logos と見るに至つたのである。西洋哲學の言葉でいへば即ちプラトーンの所謂る觀念である。

この所謂る「觀念」について實在論と名目論との爭が中世にはあつた。又印度では聲常住論と中觀論との爭もあつた。その爭ひは歸するところ「觀念」の全躰に着目しなかつた爲めに生じたのであるが、今此事は論ぜず、兎に角宗教なり美術なりは現象の中に實相なる觀念を發揮するを職分とする

* * * * * * * * *

實相なる觀念ロゴスは何事にもその生命の根柢をなしてをる。さすれば人生の半をなしてをる女性の實相は如何にして求むべきか。平たくいへば、世間の各國や歷史の過去に多くの婦人が現はれてをる、それ等の婦人は各その國や時代や又教育や境遇によつて各

異なる性質を持つてをつたし、又性質に從つた生活や活動をしたので、所謂る十人十色である。然しながらその特質や境遇も婦人としての特質や境遇であるから、そこに何か婦人として特有の性質を現はしたといふ消息がなければならぬ。かれ等の個々別々の活動を致さしめたその根柢には常に婦人としての特色が存在してをる。固よりその特色は決して何れの場合にも純粹に又抽象的に現はれたのではないが、その變化個性の源泉として婦人なる性が現はれてをる。先きに説明した見方からいへば、その現實別々の婦人は、一つの理想一つの觀念の千差萬別の現はれ方で、生々死々の多くの婦人はこの婦人たる女性たる實相觀念の發表である。少くとも吾等は宗教的に又美術的に、總ての婦人に現はれてをる此の如き實相を發見する事が出來る。或は又少くとも佛教やキリスト教では之を發揮するを勉め、詩人や美術家は之を發揮して人に示さうと試みた。

此の如き「理想の婦人」即ち「婦人の理想」を稱して茲にドイツ詩人の言葉を用ひて「久遠の女性」(Das ewig Weibliche)といふのである。即ち一人一人の生滅の婦人に普く通じて、その生命活動の根柢をなしてをる婦人の特性或は理想といふ意味である。

多くの詩人の詩作や、又多くの宗教家教祖が如何にこの「久遠の女性」を見たかは他日に讓つて、こゝに簡單に佛教とキリスト教との「久遠の女性」を觀察しよう。

吾等近世の文化に育てられた、人間、即ち希臘思想とルネサンスの文化の潮流を汲むでをる吾等にとつて、「久遠の女性」として第一に心に浮ぶのは、その美である。溫雅でしなやかで麗はしいのが女性の理想らしい。然るに佛教は少しもこの點を認めない、少くとも之を以て「久遠の女性」とはしない。此は印度思想の通性で、印度思想は天然に對しても人事についても美麗調和といふ點を看過する。佛教

の道德は主として世外的(即ち出世間的)で、總て一つ一つの物象或は心活動を迷ひと斷じて、その生滅のない過境にのみ理想を求めようとする。それ故に美の現はれとしての女性は之を排斥する。感情が馴雅で而かも濃厚で、情緒を本にして自らも動き、人をも情緒で動かす女性の特性を輕んずる。輕んずるのみならず、此の點は即ち修道の男子の心を奪ふ者として之を排斥する。多くの佛弟子がその修行の間に女性に對して、その肉躰の美に魔せられようとして之と鬪ふた實例も多いが、その最も標本的なのは佛陀が成道の前に三人の魔女の誘惑に抗抵した譚である。こゝには三人の美女は名を可愛、可嬉、喜見といふて、即ち婦人のチャームの代表、それが佛傳では生死の因である情慾魔王の娘で、佛を誘惑しようとした(その誘惑の工合や言詞は印度宗教史考三六七頁以下參照)。即ち概括して云へば佛教では婦人のチャーム美は情慾と離るべからざるもので、悟道の

誘惑である、この點に「久遠の女性」を觀るのは迷の根本である。

次に印度思想の通性を享けて、佛教は知力を重んずる。一切の迷ひや苦みを絶つ菩提心は歸する所智慧である。此故に主として感情に富み知力では男に劣る婦人は菩提の道には緣遠とする。それ故に佛教前の神歌にも婦人の悟りを得る事は出來るとして、而も「卑人や婦人すらも」とある。佛教の中で所謂る女人成佛の標本としては觀經の韋提希夫人や、龍施經の長者の娘龍施や、波斯匿王の娘離垢施や、又有名な法華經の八歳の龍女など澤山あるが、婦人としてその女性の特質に依て成佛するのでない、皆一旦男身とならなければならぬ。淨土門で大切な大經の阿彌陀佛第三十五願の女人成佛にも佛の名を信じた婦人は復再び女身とならぬと誓てある。轉女身經(宇九)などにも多くの胎兒が信仰で佛の教をきいて男子となつて生れたといふ說があり、龍施女の如きはその熱烈な信仰からして佛道に

入る爲に、樓上から身を躍らしたところが、その地に落ちる迄に男身になつたといふ傳說で、此は有り難い事になつてをる。

つまり女性としては佛道成就の資格はないので、佛はその姨母なる大愛道以下五百の婦人が入道して比丘尼にならうと願つた時に。中々之を聽許しなかつた、而して之を聽許するに至つても比丘尼の八敬法とて、比丘尼は常に比丘の敎訓指導に從ふ事を命じた。固より佛敎でもその古今を通じて、決して菩提の道には婦人を全く無資格としたのでなく、現に大愛道にも女人が沙門の四果を得る事を保證してをる。又佛典の中にはウパニシャドと同じ樣に、幾多の俊才婦人が現はれ、かの有名な勝鬘夫人の如き、寶女所問經(玄五)の寶女の如き、法華三昧經の王女利行の如き、皆滔々として、佛敎の眞理を論じ又之をきゝ、阿術達王女の如き隨分佛弟子等と論議を交へてをる。然し此等も亦女性の特質から佛道に入り又修行したのでなくて、その

修行法も悟得の方法も知見も皆男子と異なる事はない。能く情慾を制して知見を開くといふ佛道修行の要は男女の別に拘泥するではないが、どちらかといへば總て男子的に强健剛意又卓邁な性能から出てをる。蓋し佛敎の始の時代には變成男子といふ概念はなかつたが、其實は明に行はれ又認められて、つまり比丘尼は比丘の法に從ひ倣ふを要し、知見ある婦人は男子と異なる事はない。即ち佛道の女性は變成男子とまで行かずとも男子的女性でなければならぬ。

之を要するに、男子に對する女性として、又女性自らの性質として、女性の美麗な事、情緒に富むでおる事、感情で自らも動き又人をも動かす點から見て女性は佛道に遠い、或は有害である。然し佛敎は全く女性のチャームを認めないのではない、即ち婦人のチャームで男子を正道に誘引する、信仰ある婦人が男子を改宗せしむるといふ事は十分認められてをる。阿闍世王の女なる阿術達が女身を改めず

に、深い般若の智慧を貯へて人を度したといふが如き、又は須摩提女が曾て發願して世々富家の女で美婦人と生まれ、女身を轉ぜずに佛に値ひ人を度しようとしたといふが如き、其の實例で、比丘尼の傳道の如きもこの方面から觀察すべきである。然しこれはどうしても權道方便と見做されてをるので、女性の溫雅な麗質を特に「久遠の女性」として認めたとはいへない。

最後佛敎で最も重んずる女性の德がある。即ち母、として、の生育の恩、或は慈愛で、この點は第一に明に佛陀のその生母並に姨母に對する態度に現はれてをる。姨母なる大愛道に比丘尼たる事を許したのもこの關係が與て力あつたので、然らざれば中々婦人の出家修行を許さなかつたであらうといふ事は、律本の歷史から想像出來る。即ち男子の修道者である比丘の集まつてをる敎團に、比丘尼なる女性を入れるといふ事は、或は將來敎團の嚴格なる修道を害する端緒

となりはしないかとの憂慮を佛は抱いて居つた。然し先づ第一の比丘尼が自分の姨母なる大愛道であつて佛陀敎主自らが一つの標本を示して、總て比丘は女性に對しては母と思へ、決して情慾の奴隷になるなといふ敎訓を實例で示したならばよからうといふ考へがあつたらしい。そこで佛敎最初の比丘尼は即ち佛の姨母なる大愛道であつたといふ事が明に戒律の中の記錄に記され、又それ故に大愛道の入滅後にも佛は特に生育慈愛の母の恩を說いて、自らその葬りを行つたといふ事は佛敎の肝要な敎訓として殘つてをり、又歷史上の事實として十分信用し得る。傳說や佛滅後二三百年の彫刻にも現はれてをる如く、佛陀はその生母、摩耶、夫人の爲に法を忉利天で說いたといふ事も、佛敎の古い信仰。又本生の中にも鹿の母がその子を愛して、死に就いた、その鹿母は即ち佛の前生であるといふ。又或る卑賤なる老女が佛の所に來て法を聞いて、成佛した時に、弟子達

が卑賤の老女の悟りの早いのを驚いたに答へて佛はいつてをる。此の老母は即ち過去の世に自分の母であつた、但その時に自分が出家しようとしたのを母として許さなかつた爲に此く卑賤に生まれたが、今は佛の一時の母として此く早く悟りを得た。即ちこれは佛の母に對する報恩といふ意義と、又母であるといふ功德を明かにした說法である。それであるから又大般若經には一切智慧なる般若、波羅蜜多を佛母として、一切の佛は般若を母としてその恩を思ふといふ事がある。この般若佛母の觀念は西藏の佛敎で如何はしい方面に發達もしたが、兎に角母は生育慈愛の德を代表するといふ觀念が存在してをつたは明てある。

母の生育慈愛の方面に女性の德を觀ずる事は佛敎では明白に又健全には發達しなかつたが、其方面が後世の佛敎に存在して、印度敎の女神なる準提（チュンデー）や多羅（ターラー）は紀元六七世紀の頃には隨分南北印度のみ

ならず錫崙でも崇拜せられて居つた。而して此等の女神は自然に觀音と同一視せられたらしい。觀音は其名によれば男性であるが、普門品にもある如く女身をも現はすので、支那佛敎では何となしに女性との關係が多くなつて、日本では現に殆ど女性の神の如く見られてをる。然し印度敎の女神は主として生殖の力であるから、慈愛の方面よりは生育の方面が多い樣である。然し慈愛の方面も段々明かになつて、かの吳道子の育兒觀音の圖の如きその觀念を代表し、下つて明治畫界の大天才狩野芳崖のコンセプションには、觀音は母としての大慈愛の表象となつて、かの大作を出だし、佛敎の觀音は殆どキリスト敎の聖母と同じ點まで發達した。蓋し觀音に對する此種の觀想は唐以後の事らしく、その發達にはキリスト敎の聖母崇拜が影響してをるかとの疑もあるが、然し支那なり一般アジアに傳はつたキリスト敎はネストル派で、この派は聖母崇拜に反對したもの

であるから、先づこの影響は否定するがよいらしい。つまり宗教信仰の自然の要求と發達とで、「母の慈愛」に女性の德を認めて此に至つたものであらう。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

此に於て吾等は一轉してキリスト教の聖母崇拜を觀察する要がある。キリスト教の初に當つて、一般に婦人に對する觀念は佛教との大差なかつたといひ得る。但キリスト自身は佛陀ほどに多く婦人の嫌ふべき事を教へず、又佛陀と明かに異なる點は夫妻の關係について明言してをる事である。然し全躰としては特に、女性として理想を發揮したといふ點は佛陀と同じく多くないので、例せばカサンの婦人やシモンの家での悔悟の女（ロマ教會では之をマグダラのマリアとす）の如き皆信仰一つで救はるといふ點に於て男子と異なる事はなく、恰も佛陀に感化せられた婦人が皆智慧の力で佛道に入つ

たと同じである。佛陀が淫女菴婆波利（アンバパリ）を化した如く、キリストはマグダラのマリアの悔悟を容れ、佛陀には常に母の摩耶と姨母の大愛道とが伴つて居る如く、キリストには母なるマリアが伴ひ、特に二つとも死の前後に母が現はれて居る。二者は共に多くの婦人を化したこれ等は兩方の一致である。その異なる點を擧ぐれば、佛の傳記では成道前の誘惑に眞の妻女があり、又魔女が情慾の化現として佛を誘つた。キリストには此事がない。この點では佛傳の方が明に女性に對する觀念を表し、又女性に對して吾等總てが先づ情慾の見方を捨つべき事を教へてをる。その次には佛は修道の制度を定めて比丘尼を作つたが、キリストには此點がない。佛は佛として婦人に對して婦人としての愛情或は同情を表はさなかつた、彼等をして佛道修行の爲には男子的たらしめようとした。キリストは婦人には婦人としての同情を持て居つて、マルタやその妹のマリアの如き

婦人がその傳の中に現はれてをる。但し信仰て救はるゝといふ點については婦人も男と異なる事はない。

此の如くキリストの女性觀は佛陀のに比して多少溫和てあるらしいが、十分特徴とすべき程てはない。使徒ポーロ以後遁世的傾向が多くなつてからは、キリスト敎の中でも女性に對する態度は佛敎と同じ樣に峻嚴になつて來た。或る僧の如きは妹に對話する時にも鐵柵を隔てた位てある。然し二敎共に女性を救ふ爲めに盡した熱心は同樣て、比丘尼と女修道者と共に立派な制度の下に發達し、此等の女性傳道者の活動も共に活潑てあつた。而して二敎共にその間から母としての女性に對する觀念を發達した事は著しく、特にキリスト敎の聖母崇拜は善美なる宗敎心の中心となつた。

恰も佛敎ては佛滅後二百年頃の彫刻に、佛陀が母の天に上つた景を示して居る通りに、キリスト紀元二世紀の穴墓（カタコンブ）の壁畫には明に聖

母の像が現はれて、孩兒を抱いた母を他の人が崇拜してをる景を畫いてある。典籍の方面ては十分明にはないが、マリアを聖母として神位に列する傾向はキリスト敎の中に早くから存在して居つたらしく、その始めは單に救主の母として尊むだにしても、既に福音書にも明にマリアは神の特寵を受けた處女とあり、又キリストの人格が單に神の養子や神子の影てなく、眞の人て眞の神となるに及むては、その神人を生むだ聖母も自ら神母とならざるを得なかつた。即ち三二五年ニカイアの公會てキリストの神人たる事が議決せられた後百年、四三〇年エフェソの公會はマリア聖母の神たる事を決した。この議決はキリスト敎の宗敎に對しては重要なる意味を有する事柄てある。既に人の子て即ち神の子たるキリストが吾等の救主てある、吾等を救ふ實力がその人格に現はれてをるといふ信仰がキリスト敎の大本てある以上は、即ち何れの人もその精神の中にキリス

トを得、キリストを生み、その信の獲得體現によつて神に歸り得る以上は吾等は皆自分の中にその信、その救ひの力を生む母を有して居なければならぬ。生育と慈愛との生活不息の源泉を吾等の中に汲み出だし得るこの源泉は總ての精神に通有であり、個人世相の生滅に超然たる者で、即ち萬人の母、永遠の母である。既に吾等自身の中にも「久遠の母」を有するなれば、その母の慈愛を感得した理想の眼から見れば、肉身のキリストの母マリアは又この「久遠の母」の一つの現はれとなる。肉に依れば、ダビデの裔なるキリストを生むだマリアは肉の方から云へば人てある、一人の婦人てある。然しキリスト教を信じ、キリストを靈として神の子と信ずる以上は、その母なるマリアも亦靈てなければならぬ。即ち聖母は又神て、生滅肉體を超へた「久遠の母」なる神てある。この母はキリストを二千年前に生むだと同じく、何れの時、何れの處にも吾等の母として活きてをる。吾等は

信仰の中に何時てもこの母を活かし得る、生滅の中に永遠の神力を信ずる宗教の信に依つて之を活かし得る。又現實の中に不滅の理想を發揮する美術の感得、美術の製作の中にも之を活かし得る。それ故に既にキリストを神子としてその宗教の大本生命としたキリスト教はこの神子なる神人と共に神母を得てその宗教的生命の盡きざる源泉とした。キリストが男子といふよりは寧ろ一般に人間の方面に現はれた理想となつた如く、聖母マリアは永遠なる女性の理想として、その信仰の中に大なる宗教と美術との契合を發揚して今日に至つた。

キリスト教の聖母は固より生育慈愛の方面て女性の德を代表するが、そこにも一つ「永久の處女」といふ德を代表して居る。此の處女の德といふのは即ち又圓滿の愛と見得るので、假令キリストは夫婦の關係を神聖としても、既に妻たるものはその愛を夫以外に及ぼし

てはならぬ。然るにマリアは、傳說では夫を持つてをつたとしても、信仰の理想としては「永久の處女」で、その愛は萬人に及ぶ、又その愛は私慾や肉慾を離れた清淨の愛である。(佛敎では處女の德について明瞭な觀念が現はれて居ないが、成佛得道の婦人はかの龍女や龍施を始めとして處女が多い)。此の如くにして聖母は婦人の愛の大なる代表、久遠の女性を完全に現はしてをる神格となつた。

固より或る場合には聖母は色々の祈願を聽く神になつてをる、恰も觀音の八難救助と同じく、聖母を檣頭に揚ぐる航海者もあり、城壁城門に之を祭つた事もあり、戀の成就や病の平癒を聖母に祈る者が今日もある。然し全躰として聖母の崇拜は清淨で美麗で平和な宗敎的滿足と美的趣味とを人間に與へて、女性の美德は總て聖母から出で、又聖母に歸した。婦人は聖母の信仰からしてその美德を養ひ又發揮し、男子も亦聖母の崇拜に依て婦人の中に美はしい性を發見し

て之を尊重し敬愛した。それ故にキリスト敎美術の中で聖母の像を見れば、その時代その國又その作家の女性に對する最高の理想を伺ふに足る。天地人生の溫雅なる女性的美德は聖母に集中したといつてよからう。

先に述べた二世紀の聖母像が現はれた後、四五世紀のビザンテン美術では聖母は殆ど形式的に天后として現はれて、その中には愛と美とを認め得ない。これは東敎會が信仰よりも智慧を重んじた爲で、その特色は今日の希臘敎會にも殘存して、かの敎會では聖母に特別の位置を與へない。然るに西歐に在つては詩人も畫師もその理想の女性を聖母に寓し、又聖母に求めた。東歐に於ける如き古代神話の殘り物でなしに、活きた感情の中に活きた理想を求め、讃美歌詩人は壇に立つ香の中に美女の化身を眺めて「曙の光の如く若やかなる美はしさの女神」が己れの心に時めく思ひを起させるを歌ひ、その

美はさしもの地獄には世界も收まり盡す、その前には全世界も一つの塵に同じと歎じた。十二三世紀のミンナ詩人が美の方面を主として崇めた感情は信仰の醇熟につれて又愛の母となり、第一の名手として十三世紀のチマブーがその信仰をかの聖フランシスの靜な深い信に養つて圓滿なる母の德、慈愛の化現を畫き出だして、以後三百年間の信仰と美術とを嚮導した。その間或はロビア一家の陶像やピントリキョの畫が浮世の情慾から離れて、信仰の爲に子を慈育する母を發揮したのもあり、又クリヂリなどの貴族的婦人を理想としたのもあり、マンテニャの感覺的なる、レオナルドーやペルジノの幽邃沈鬱なる神秘的精神を表したのもある。が終にミカエランジエロの彫刻では健剛で希臘的美質を理想として三つの聖母を殘し、その風はラファエロにも現はれてかれは田園的婦人、或は貴族的婦人等色々の變化を試みた。此の點については非難すべき事があり、

又チマブ以後に至つた變化の歷史も詳述したいが、茲には此を略して、一言ラファエロの最大作システナ聖母が此等變化の大成をなしたといふ事を述ぶるに止めよう。

ルネサンスの美術は技術では進てをつても、その內面の活氣、活氣の源泉である信仰に至ては到底その前に及ばない。チマブーやリッピの如き落ちつきはラファエロにはないが、然し曾てバドアなるシステナ堂にあつて今はドレスデンにあるこの聖母は殆ど圓滿に、慈愛の母、威嚴の女王としての聖母を描き出だして而かも美と溫和とを缺いて居ない。チマブーやピントリキョの聖母は個人的信仰を代表し、信仰に養はれた愛の母としての側は遺憾なく發揮せられて、從て沈着幽邃の趣があるが、ラファエロの此の畫には當時段々世界統一の理想を明かにし來つたロマ敎會の敎會的理想をよく代表してをる。即ち救主キリストの敎會は又吾等の母である、敎會は母

の慈愛と常に衰へない美と清淨とを以て人を化し世を統御すると云ふ理想の女性である。ロマ教會の「久遠の女性」は此の如くにして聖母の中に求められ發揮せられた。

宗教改革は萬事ロマ教會に反抗した爲に、聖母の崇拜を排斥し、宗教感化の女性的方面を閑却するに至つた。固よりこのシステナ聖母の如きロマ教會の教會的理想を容れ得なかつたにしても、チマブーの信仰、ペルジノの神秘の理想から出た「久遠の女性」をすら排斥したのはその意を得ない。それ故新教の中でもこの缺點を感ずる人は少くない。現にピエテストの讃美歌には此の傾向は多く表はれてをる。又ゲーテがそのファウストの中で可憐の少女マーガレットを救ふに聖母を呼び來つたのも此が爲である。宗教の感化は決して男性的の理論や教權のみて行はれるものでない、女性的の情緒や慈愛を必要とするのであるから、佛教及キリスト教の中に「久遠の

女性」の理想が生じ來つて、主として之を母としての理想に求めたのは宗教の自然の需要である。

* * * * * * * *

「久遠の女性」は母としての慈愛に求むべきである、といふこの東西二大宗教の實相觀は吾等に如何なる教訓を與ふるであろうか。女性の德は母としての愛のみに盡きては居ないかも知れないが、然し他の總ての女德はこの久遠の女德から湧き出づる德ではなかろうか。溫雅、婉麗、調和の德、情緒の濃かなる、觀察の鋭敏なる從てよく人をなつけ人の心を和らげて、人世に平和と歡樂と光明とを持ち來たす諸の女德は或はこの「久遠の女性」の自然の結果と見るべきである。母としての女性がその源泉であつて、此等の德が自ら處女の德とも戀人としての力とも現はれると見得る。然らば佛教の信仰に現はれ來つた佛母、キリスト教で崇拜せられた聖母は又世間の總ての女

徳の源泉でないか。世に平和あらしむるのも、人に信仰を與ふるのも、又婦人をして優美和樂の徳を發揚せしむるのも、男子をして剛健の中に和順暢達の性を失はしめないのも、この「久遠の女性」の賜と見得るのである。特にキリスト教の中で聖母の崇拜がゆかしい信仰を養つたのも偶然ではない。戰鬪の國民も生存競爭の人もその勇敢の氣象の裏面にこの「久遠の女性」の崇拜、渴仰、歸命を遺却してはならぬ。

佛教とキリスト教との「久遠の女性」は女徳の源泉をよく極めて、吾等に永遠の光を與へてくれた。然しこゝに尙少しく不足を感ぜしむる點のないではない。母の慈愛に「久遠の女性」を發揚した結果、又二教共に遁世的傾向を多く有した結果、前に述べ來つた如く、よく人を感化しチャームするその婉麗の美質を母としての女性の必然の結果とする見方はその二教、特に佛教の中には看過せられた。即ち

一層直接に云へば、戀人として、の女性、戀人として愛すべき婦人といふ點が十分明かに發揚せられなかつた。固より此等の女徳も母としての女性に基く性能ではあるが、その點は此等宗教の中よりも寧ろ希臘思想、それからルネーサンスの文化の中に明かで、その結果は段々近世の文學の中に現はれて來てをる。ゲーテのファウストのヘレナや、ワグネルのニーベルンゲンでのブリュンヒルデの如き、皆今迄の宗教で十分明かでない方面に「久遠の女性」を求めつゝある。ワグネルが「將來の女性」とした「飛び歩く和蘭人」の戀人センタの如きは果して、今迄の女性に代はつて眞に「將來の女性」となるべきか、又なるであろうか。此の問題は別にして、今は今まで世に發揮せられた「久遠の女性」は母としての慈愛又威嚴であるといふ事を約言して此の論を終らう。

（卅七年五月）

美の宗教 終

明治四拾年五月十八日印刷
明治四拾年五月廿九日發行

美の宗教
定價金壹圓

著作權所有

編者　姉崎正治
發行者　大橋新太郎　東京市日本橋區本町三丁目八番地
印刷者　石川金太郎　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
印刷所　株式會社秀英舍　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

◉姉崎正治、述作、編輯目錄

	頁數（大さ）	年月	代價	出版者
印度宗教史考 既刊	八一四（菊判）	卅一年八月	一八〇	金港堂
ハルトマン宗教哲學	三九四（菊判）	卅一年五月	五〇	博文館
佛教聖典史論	一九〇（四六）	卅二年九月	三五	經世書院
宗教學概論	五九〇（菊判）	卅三年三月	一五〇	早稲田大學
上世印度宗教史	三一四（菊判）	卅三年二月	七〇	博文館
復活の曙光	四六七（四六）	卅七年一月	七五	有朋館
現身佛と法身佛	二九〇（四六二倍）	卅七年十月	七五	有朋館
Buddhist and Christian Gospels.	二四七（四六二倍）	卅八年五月	一三〇	有朋館
國運と信仰	五八六（四六）	卅九年三月	一〇〇	弘道館
脚本瀧口入道	一四四（四六）	卅九年四月	三五	春陽堂
美の宗教	三八〇（四六）	四十年五月	一〇〇	博文館
準備中			出版豫定年月	
The Four Buddhist Agamas in Chinese, compared with Pāli Texts.			四十二年	
高山樗牛			四十二年	
宗教の理想			四十三年	
The Sutta-Nipāta, compared with the Chinese versions.			四十一年中	

大哲 フイヒテー氏原著、文學士杉谷泰山君紹述

人生解決 **人間天職論**

全一冊 洋紙數三百餘頁 菊判 洋裝
正價五拾五錢 郵稅八錢

人間の自覺、人間の本分、自他の實在、社會の成立、國家の發展に就きて、破天荒の見解を與へ、天下を率ゆる學者紳士の本領に關して、驚天動地の大文字あり、爲政家の用意、教育家の覺悟、著述家の準備等に論じ及びて、或は誨へ、或は戒め、殊に將來の學者紳士を以て任ずる學生の用意覺悟、成功の秘訣、天才と勉強との關係、智能の發揮、德器の涵養等に至りては、千古の卓說なり。更に又本書の後半は、人生問題の解決にして、人生に對する疑問、宇宙に對する難問に起點し、百問百答を試み、遂に人生に對する一大信仰の旗幟を鮮明にし、以て新天地に新生活を得て、一大快哉を呼べる所は、實に宗教と哲學と一丸とせるフイヒテーの大手腕なり、三讀四讀之を重ぬる毎に、益々心膚く體肝なるを覺ゆるは本書の特徴なり。

豫言者 宮崎虎之助君著 **基督觀**

全一冊 洋裝菊判
正價四拾錢 郵稅六錢

英雄を知る者は英雄なり、ナポレオンにして始めてアレキサンダーを知ることを得べし、古へ孔夫子は春秋を著はして堯舜文武を知ること、己れの心事の如くに明かなる所以のもの、畢竟聖人人の資性相通ずるあるを以てなり、基督耶蘇のパプテスマのヨハネを評するや、アバラハムよりも、モーゼにもまさりて大なるものと爲す、ヨハネを知るものは果してそれ誰基督なるか、然らば則ち千古の偉人基督を知るものは果して誰ぞや、基督教の建てられてより茲に二千年、基督の傳記を書くもの、これが評論を試むるもの幾千萬を以て數ふと雖も、天の階して登る能はざる凡庸の蛙見に屈し、非庶の喞々、豈唯燕雀の鴻鵠に於けるのみならんや、今や時代の希求心に應じて豫言者は出現しぬ、その齎らせる崇高絶大の自覺に照らして基督の眞相を觀ず、豫言者の基督觀は古來未だ曾て有らざるところ、その靈眼に映じたる基督の果して如何なるか、瞻ふ之をこの書に質せ。

發兌元 東京本町 博文館

法學士　工藤重義君著

世界宗教制度論

上製　金五拾五錢　郵稅十錢
並製　金四　拾　錢　郵稅八錢

本書は世界文明諸國に於ける宗教制度を類類統合して法理學上より之を論述したるものにして材料は曹洞宗高等學林に於て講述せる講本を骨子とし獨佛の諸書及我邦の制度學說等を參酌したれば記述系統ありて定論縱横殊に卷末には餘論として宇内平和論及犯罪救濟論を綴せり共に法學研究の範圍に屬して而も宗教的事業に密接の關係あり大方篤學の士是非一讀を要すべきなり

東京大學文科大學教授
文學博士　姉崎正治君著

宗教哲學

上製　金五拾五錢　郵稅十錢
並製　金四　拾　錢　郵稅八錢

本書はカント、ヘーゲル、シエリングの宗教哲學論を統合し、シライエルマッヘル、ビーデルマンの基督教宗義學を批評し、吠檀多の無宇宙論佛教の涅槃論を精査して東西宗教の粹を蒐め、古今哲學の結果によりて宗教哲學の一大系統を組織せしものなり

發兌元　東京本町　博文館

文學士　蜷川龍夫君著

佛教倫理學

上製　正價五拾五錢　郵稅拾錢
並製　正價四　拾　錢　郵稅八錢

二十世紀式に依て佛教を知らんとする者類りに繁殖し此要求に應じて式ば哲學的に佛教を論ずるものあり或は歷史的佛教を說くものあり或は宗教的皷吹に勉むるあり、然れども概して未だ堅確なる佛教の眞體を發揮すること能はずして其或者は空論に流れ或は病的迷信的に陷し、人生社會の全般に活用することを得ず、斯の如きの缺陷と時代の要求とは遂に佛教倫理學を產み出せり本書は秋然たる組織に由つて其全豹を盡せり、苟も人生問題に志あるもの一讀せずして可ならんや。

文學士　石原即聞君著

佛教哲學汎論

上製　正價五拾五錢　郵稅拾錢
並製　正價四　拾　錢　郵稅八錢

佛教は一面に於て知的考察を爲して哲學的說明を立て、他の一面に於ては宗教的說明を爲す者なるが故に、佛教は獨り宗教として研究するの價値あるのみならず亦た之を一種の哲學として研究するの價値あるなり、於茲佛教を以て一の哲學組織と見なし其知的考察の方面即ち哲學的方面を觀察して之が叙述を試み以て哲學として如何に價値あるを研究するもの是れ本書の主趣にして石原文學士曩に佛教史を著はし今更に本書に於て佛教哲學の要領を論ず周到の說述寸毫の遺憾なし。

發兌元　東京本町　博文館

彦根第三佛教中學校教頭　石原即聞君著

日本佛教史

上製　金五拾五錢　並製　金四拾錢　郵稅拾錢　郵稅八錢

佛教の初めて我國に傳來せしは今より一千三百五十二年の昔の事なり、其間時に弊害なきにあらざりしも我國の精神的并に物質的の文明に貢献せし處實に尠しとせず、斯く我國の文明に多大の關係を有する一大宗教に傳來起原若くは教義の研究に心を用ゐるは少くとも現代學者の義務なり、彦根第三佛教中學校教頭文學士石原即聞君つとに茲に着眼し今や本書の著あり、由來我國佛教史に關する書少からずとや、其多くは專門家の手に成り、一般人士の解しがたきもの多し、然るに本書は此缺陷を補ひあらゆる諸書を參酌して沿革的系統をして最も平易に叙述せられたれは日本佛教の歴史を知らんとするの人は無比の良書なり。

文學士　加藤玄智君譯

世界宗教史

上製　正價五拾五錢　郵稅拾錢　並製　正價四　拾錢　郵稅八錢

主觀的空想を排し、確乎たる史的事實に據りて宗教を學ばんとするは、近十餘年間に於ける時代精神の主潮なり、今や更に進んで世界宗教の全般に亘り、其發達開展の關係を史的事實に照して比較攻究すること最も切要なりとす、著者茲に見るあり、思想界刻下の急需に應せんが爲めに本書を譯述せらる、行文又平易流暢毫も難解の惧なし、眞に宗教史研究の好資料たり

發兌元　東京本町　博文館

英國　エドワード・ケヤード氏原著
文學士　融道玄君譯

宗教進化論

全一冊　上製　金五拾五錢　郵稅拾錢　並製　金四拾錢　郵稅八錢

本書は現時英國第一流の哲學者にして牛津大學ベルリオル、コルレッヂ學長たるケード氏が深邃なる學識と透徹せる眼光とを以て宗教の發達を討究し、宗教が客觀教、主觀教、絶對教の三大段階を成して有機的に發達進化じたる所以の理法を詳述し、希臘の宗教、佛教、猶太教、基督教に就て之を例示したる名著にして、所論清新博大、實に宗教學上無二の讃典たり。苟も社會の一大現象たる宗教の本性と其發達の哲理とを知らんと欲する者は其宗教家たると無宗教家たるとを問はず必らず之を一讀せざるべからず。

文學博士　南條文雄君校閲　文學博士　前田慧雲君著

佛教美術

上製　正價五拾五錢　郵稅拾錢　並製　正價四　拾錢　郵稅八錢

日本は美術國なり、而して其原流は佛教によりて開發せらる、即ち日本美術を知らんとせば、必ずや佛教美術の研覈を忽諸に付すべからず、今や美術研究の聲喧しきにも拘らず、未だ日本美術史だも編著せられざる所以何ぞや、他なし原始根元の如何なるかを知り且つ導くものなきに由れり前田博士は碩學の大家なり、茲に佛教美術を原始的に考究し、其發達及び形狀につき、懇篤なる編述を了し、而も南條博士の校閲を經、我帝國百科全書の一部として茲に之を出版するを得たり嗚呼是れ我美術研究上の一曙光にあらずや、又斯道を益する決して尠少ならざるものなり。

發兌元　東京本町　博文館

工/3X6

文學士　常盤大定君著

佛陀之聖訓

特製金一圓　郵税六錢
並製金八十錢　郵税六錢

本書は浩瀚なる一切藏經の中より最も簡明に佛陀の訓誡を蒐集し佛教根本の何たるかを示し此道の教誨購本に供せんが爲めに纂輯せられたるものにしてその内容は凡そ廿七章に分ち細科を設け秩序整然初學の人にも解り易く携帶に便にして表裝亦美なれば布教家演説家さては佛教信者に至るまで佛陀の訓誡を仰ぎ精神の資料を求めんとするものは本書に依るに若くはなし。

文學博士　南條文雄先生序
文學士　常盤大定君撰

南北對照
英漢和譯

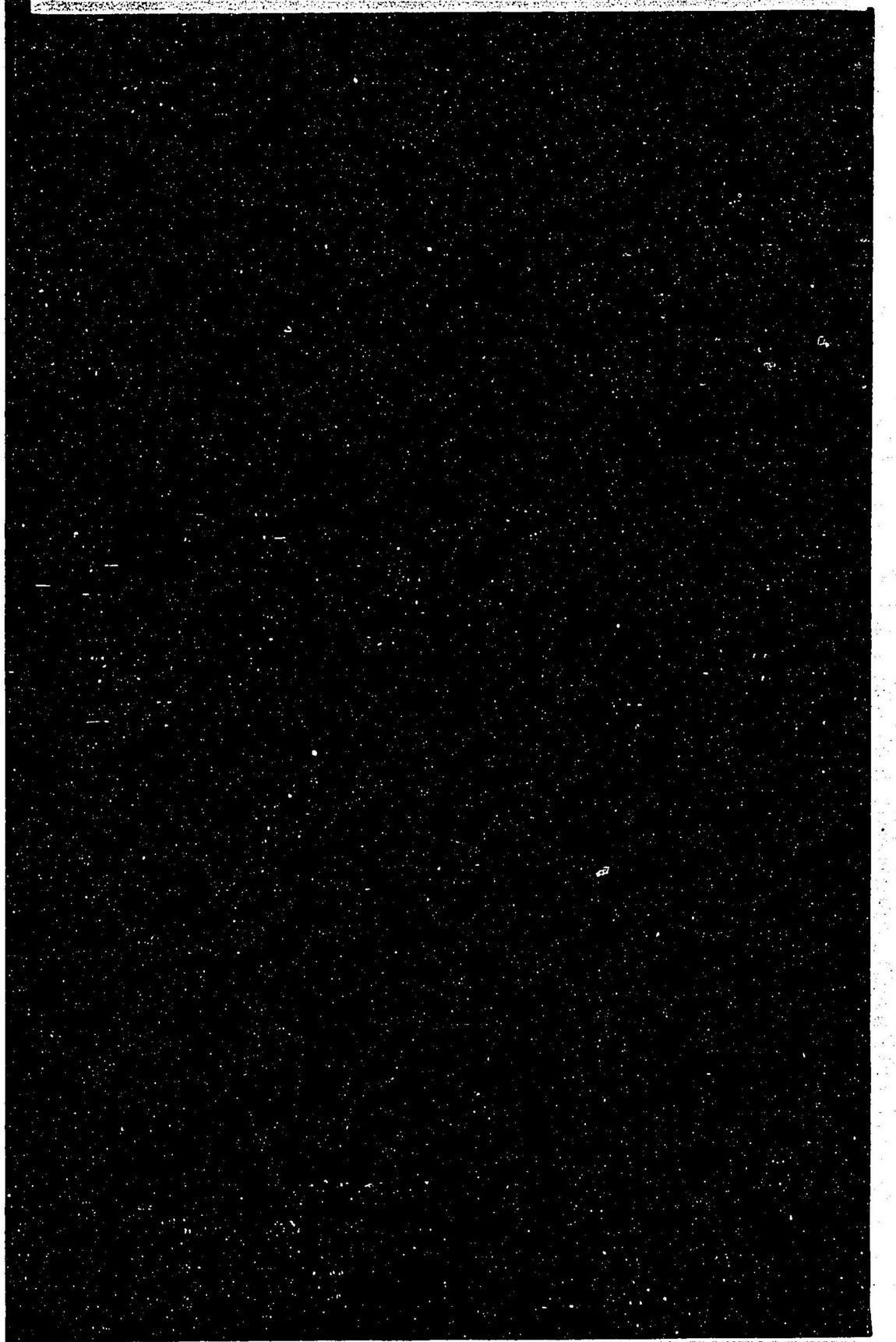
法句經

全一冊洋裝大判
正價金四拾錢　郵税八錢

法句經は諸經律に散在する佛陀の金言を集錄せるものにして現存するものに南北兩傳あり今此兩傳は對照比較して佛典の講究に資せり。抑も此經は始進者の入門たると共に亦實に深入者の奥藏として常に學道者の羅針盤たり輓近に至り泰西學者の注目を惹き英に佛に獨に幾多の譯述を重れたり是れ其簡潔の語中に佛教の眞髓を該羅し精妙の句中に法門の綱要を含蓄するを以てなり設者一たび之を繙讀せば佛教本來の面目を諒知するに於て可愛の資料なるを得べし眞に是れ佛教研究の大要典と謂ふべきなり。

發兌元　東京本町　博文館

8



31
345

013757−000−8

31−345

美の宗教

姉崎　正治／著

M40
ABA−0246